The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	イメージとしての「日本」
Author(s)	伊藤, 公雄; 金水, 敏
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/13192
rights	(c) 大阪大学21世紀COEプログラム インターフェイスの人文学 / Interface Humanities
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

第Ⅱ部
イメージとしての〈日本〉
——方法編——

イメージとしての〈ポピュラー・カルチャー研究〉

古川岳志

1. はじめに [*1]

与えられた課題は、ポピュラー・カルチャーを研究している者の立場から、ポピュラー・カルチャー研究が抱える「困難」について指摘せよということであった。率直に言って、自分がこのようなテーマを与えられたことに、かなりの「困難」を感じた。「なんで私が」と思った。アカデミックな視点から、ポピュラー・カルチャー研究全体の抱える課題を論じるのは、最新の研究成果や文化理論に精通した視野の広い研究者にこそふさわしい役割だろう。自分は、そのような研究者ではない。様々なテーマを対象にした研究者たちが、分野横断的に集まる場所で、共通の議論の土台を提供するなど荷が重い、と感じてしまうのである。

けれども、折角の機会である。ポピュラー・カルチャー研究者が、ポピュラー・カルチャー研究を考える。こんな、ややこしい自己言及的問題を、わかりやすく理論的に整理して説明することはできないが、テーマ自体には関心を持っている。普段から、それなりに、考えたり、感じたり、ぼやいたりしていることもある。

私は、修士論文で競輪をテーマにしたり、プロレスについての論文を書いたりしたことがあるので、ポピュラー・カルチャーをテーマにして研究している者であるといえるだろう。であるけれども、私自身、「ポピュラー・カルチャー研究者である」という意識、もしくは自己イメージが、あまりないのである。(ちなみに競輪がポピュラー・カルチャーなのか、そもそもポピュラー・カルチャーとは何か、ということも大いに議論の余地があると思うが、とりあえずここではおく。)

たとえば、初めて会う研究者や大学院生に向かって自己紹介をする時、「ポピュラー・

カルチャーを研究してます！」などと言ったことはないし、今後も言わないと思う。それは何故か。普段は特に考えないけれども、あえて自己精神分析的に探ってみれば、次のようなことによるのだと思う。

「ポピュラー・カルチャー研究」という言い方。その醸し出すイメージ。これらに、どうしても違和感というか、恥ずかしさというか、もっとはっきり言えば嫌悪感をすら覚えてしまうということなのではないか——。

「社会学を研究してます！」などと言うのだってもちろん、恥ずかしい。私を含めた多くの（凡庸な）大学院生（崩れも含め）の皆さんもそうじゃないかと思われるが、この「恥ずかしさ」は、「そのように『言い切れる』ほど、きちんとした『研究者』なのか、お前（＝自分）は？」という反省の声が、ココロの中にこだまするからであって、いささか自意識過剰気味とはいえ、まずは、当たり前の心理現象と言えるだろう。

だが、「ポピュラー・カルチャー研究」(類義語も含めて）という場合のそれは、また違ったもののようにも思われるのである。

そこで、本稿では、私にはどうしても「恥ずかしい」と感じてしまうような、「ポピュラー・カルチャー研究」のイメージとはどういうものか、いくつか記述してみようと思う。それによって、「ポピュラー・カルチャー研究が抱える困難」というテーマへの私なりの問題提起にしたい。

もちろん、以下に掲げるイメージは、あくまでも「この私」が持つ（もっと詳しく言えば、「ポピュラー・カルチャー研究」の「他者」たちが、感じるのではないか、と「私」が想定してしまうような）イメージにすぎない。あえて、悪いイメージばかりを強調して描き出しているという面もある。しかも具体的事例をほとんどあげていない、文字通りの印象批評であり、このようなイメージの描き方自体に、不快感を覚えられる研究者もおられるだろう。そこは、議論をした上で、私にとっての「ポピュラー・カルチャー研究」イメージが、良いものに修正できれば、と期待している[*2]。

2.「自分の趣味なんでしょ？」というイメージ

エピソードを一つ。

この発表をさせてもらうことになって、具体的な「論題」を提出するまで、10日ばかりの時間があった。その間に、COEのスタッフが大学院生のメーリングリストへ、この会の開催告知情報を流した。私が発表するであろうとスタッフが考えたアバウトな内容が書かれていたのだが、その一部に次のような記述がされていたのである。

「趣味を研究に結びつけることの困難――」

私は、このメールを読んで、とても不愉快な気持ちになった。発表を断ろうかと考えるほどショックを受けたのである。今回の発表を担当するに当たって、私にどういう役割が期待されているのか、よくわからない状態が続いていた。もちろん、おおまかな説明は受けたのだが、どのような議論の文脈で、どのような発表をすればいいのか、今ひとつ見えてこない。そのような中でのこのメールだった。私に期待されている役割とは、すなわち「趣味を研究に結びつけ」ている研究者の代表として――ということなのか。そういうメッセージなのか。と受け取ってしまったのである。そんな役割は勘弁して欲しい。メールを書いたスタッフは、よく知る研究室の同僚だ。その人には、私はそう見えていたのか。嫌だなぁ。

が、これは、私の完全な思い過ごしであった。ポピュラー・カルチャー研究が、趣味の研究と考えられてしまいがちなことをどう考えればいいのか。あくまで一般論として、議論してみてはどうか。メールの趣旨は、こういうことだと、スタッフから後日説明を受け、もちろん、私の不愉快な気持ちもなくなったのであった。

本当に些細なことである。それに対し、今から考えれば自分でも不思議なくらいの過剰反応をしてしまったわけであるが、では何故、「趣味を研究に結びつけ」ている、と他の人に思われるのが、私はこれほど嫌だったのだろうか。「趣味の研究」＝「楽しい研究」＝「お気楽な研究」。「趣味」という言葉には、軽いイメージがある。軽薄な人間であるにかかわらず、他者には「重厚」な人物と見せたい、という浅はかな願望を踏みにじられたからか。そういう面も、否定できないけれども、それだけではない気もするのだ。

過剰反応は、「図星をさされた」という意識からでてくるものだ。常日頃、気にしていることに対して、不意をつかれてズバリ指摘され、必要以上に過敏な反応をしてしまった。おそらく、そんなところだろう。確かに私は、「趣味を研究する」ということに関して、普段から複雑な気持ちを抱いていたように思う。

上述のように、私のこれまでの研究テーマは、競輪（公営ギャンブル）やプロレスであ

る。まさに、「趣味」の研究だ。

競輪は、都市研究の対象として、たまたま見つけ出したものであり、自分の「趣味」というわけではない——。プロレスは、確かに私の「趣味」であるけれども、研究テーマにする気はもともとなく、たまたま機会があったから書くことになっただけだ——。等々。いろいろと言い訳はある。とはいえ、今では、競輪をはじめとしたギャンブルの世界（ギャンブル場の雰囲気なども含めて）に愛着をもっているのも確かだし、プロレスについても、また別の論文を書いてみたいとも思っている。「趣味」をhobbyというだけでなく、tasteという意味にまで広げれば、これまでの私は、まさに、自分の「趣味」にあった文化ジャンルばかり研究対象にしてきたことは、紛れもない事実なのだ[*3]。

もちろん、研究者が関心を向ける先が、自分の「趣味」にあった場であるというのはきわめて自然なことだ。程度の差はあるだろうが、特に文化の研究においては、その傾向が強いだろう。（嫌いで仕方がないジャンルだからこそ、研究してみるという例も中にはあるかもしれないが、少なくとも私はそういう例を知らない。）それなのにどうして、胸をはって「趣味を研究テーマにしています」と言いたくない／言えないのだろうか。それは、軽く見られたくないというだけではなく、「ポピュラー・カルチャー研究」という枠組みの中で、自分の趣味を研究テーマにすることに対する「良くない」イメージを、私が持っているからだと思う。

ポピュラー・カルチャー研究が対象とするものの多くは、いわゆるサブカルチャーと呼ばれる「場」を形成している。そのカルチャーの「場」に何らかの形で参加しつつ、研究の対象にもする。「趣味を研究テーマにする」とはそういうことである。参加の形は、いろいろあるだろうが、「一ファン」という代表的な例で考えてみる。その場合、「一ファン」と「研究者」という二つの視点／役割を持つということになる。「良くないイメージ」は、特に「一ファン」の視点から感じられることである。

あるサブカルチャーの「一ファン」にとって、そのサブカルチャーが「研究される」ことは、どういう気分がするものだろうか。研究のされ方、質によって一概には言えないし、「一ファン」にもいろいろあることは言うまでもないが、「あまり良い気がしない」ものなのではないだろうか。——少なくとも私はそうである。「研究」なんて迷惑なだけ、と、「一ファン」としての私は思う。

それは、何故か。文化人類学をはじめ、文化を記述する諸分野において議論されているところの、「記述する側／される側」という権力関係の問題がまずは考えられるだろう。記述する側が必然的に持ってしまう「力」。これに対する「一ファン」としての、記述される側からの反発心。簡単に「調査」されたり、「分析」されたりしてたまるか——。だが、ことポピュラー・カルチャー研究という場合には、それだけにはおさまらないような面があるようにも思われる。

例えばこういうこと。

「研究」と称することで、「一ファン」の立場だったら、なかなかできないような、いろいろなことが可能となる（と「研究者」は思いこむ）。「参与観察」「アンケート」「インタビュー」。ジャンルの中心人物と「お近づき」になれたり、「特別な（能力を持っている）ファン」として、サブカルチャーの場の中で「頭角を現し」てみたり、誰に頼まれたわけでもないのに、「ファンの声」を代弁してみたりして。そのうちに、研究者として「出世」すれば、研究者というだけでなく、そのサブカルチャーの「専門家」として振る舞うようになる——。

「研究者」としてだけではなく、サブカルチャーの場で、「一ファン」から「特権的なファン」「偉そうな顔ができるファン」へと出世するのにも、アカデミズムの権威を利用しようと目論んでいるんじゃないのか。

もちろん、こういう「出世」を本当に実現するには、大変な努力、能力、あるいは度胸（と愛嬌？）がいることはまちがいないし、その結果として、「特別なファン」になるのも、当然といえば当然だ。しかし、とりあえず「研究」とさえ言えば、「特別な」立場を手に入れた、と勘違いしてしまえるような、そういうことを許してしまうような「仕組み」というか「空気」のようなものに対して、「一ファン」としての私は、胡散臭いイメージを抱いてしまうのだ。

「研究してます。」何か、特別な使命でも帯びたような顔をしてやって来て、その「場」の参加者の多くが、みんな知っているようなことを「資料」と称して収集し、「学会」とやらで発表したり、「論文」などと謳って出版し、自分の「業績」にする。まるで泥棒みたい。もちろん、その内容が、その場に参加しているだけでは見えてこなかったような、興味深いものであればいいけれど、ほとんどはそうではない。「アカデミズム」というなんだ

かよく分からないような「場」だけを意識して作られた「成果」にすぎないのだから。「一ファン」から見れば、拍子抜けをするような当たり前の羅列であったり、勘違いのオンパレードだったり。なーんにも分かっちゃいない。どうせそんなもんでしょ。で、「○○を研究した人」として、今度は、こっちの世界でも専門家面をしたいんでしょ。

繰り返すが、そんな簡単なもんじゃない、ってことは「研究者」としての私には、よく分かる。けれども、「一ファン」としての私は、こんなイメージをどうしてもぬぐいきれないのである。

3.「ポピュラー・カルチャー研究ってサブカルの一種？」というイメージ

「趣味」の場で、アカデミズムという記号が、「権威」として機能するのが、なんとなくイヤ。だから、「趣味を研究してる」なんて言いたくない。自分では、やっておきながら――。

こんなことを言っていると、それは私が「研究者」だからであって、「研究者」であるということを必要以上に意識しすぎているだけだ、と笑われるだけかもしれない。多くの「一ファン」、「一般の人」たちは、それほどアカデミズムなんて気にしていやしないんじゃないの。

確かに、多くの「一ファン」にとって、アカデミズムという記号など、どうでもいいものであり、政治的・抑圧的に働きかけられてきて「反発心」を引き起こすなんてことはないかもしれない。たとえもし、アカデミズムが意識されるという場合でも、反発というよりはむしろ、歓迎の気持ちをもたれることの方が、「一般」的だと言えるように思う。

自分が参加しているサブカルチャーが、愛着を持っている趣味の分野が、アカデミズムの対象となる。「大学でも研究されているほど意味のあるものとして社会的に認められたのだ。」「～も今や立派な『文化』になったなぁ。」アカデミズムが、「サブ」とみなされていた文化領域を、いわゆる大文字の「文化」に引き上げる機能を持っている以上、それをすなおに喜ぶ心性があるのも、当然といえば当然であろう。

「フィールドワークに行けば、みんな喜んで研究に協力してくれるし、アンケートにも素

直に答えてくれますよ。インフォーマントとのラポールもうまくいって、良いデータが集まることの方が多いですよ。」まぁ、そうだろう。こういう権威を感じさせないような権威こそ、より政治的な権威という気がするが——、まぁ、それはいい。

だが、ことポピュラー・カルチャー研究の対象となるような、特に「サブカル」と短縮形で語られるような対象の場合には、私が先に示したような「反発心」を感じる「一ファン」も、相当程度存在するのではないだろうか。決して、少数派と呼べないほどの規模で。

今日、いわゆるサブカルチャーの場は、ほとんどのジャンルが、「言説」の場でもある。書籍、雑誌、同人誌、そしてもちろんインターネット。そこに、どれほどの「言説」の厚みを生み出しているかが、そのサブカルチャーの広がりをあらわしていると言ってもいいくらいだろう。たとえば、ネットの掲示板などを覗いてみるだけでも、どれほど多くの人たちが、関心のあるサブカルチャー（に限らないけれども）について、発言したい、意見を聞いて欲しい、と思っているかがよく分かる。いわば、「記述する側」たらんとする人、その能力のある人が、たくさんいるわけである。そこに「研究」というくさびを打ち込むことは、つまり、無理やり、それらの人々を、「記述される側」に押しやることになっているのではないのか。そういう危惧をどうしても抱いてしまうのだ。

言説空間とは、アカデミズムという記号が、権威として最も有効に機能する場所である。例えば、単なる「一ファン」が、自分の声を多くの人に届けたいと思うと、相当の努力が必要だ。地道にファン・サイトを運営し続けたり、メールマガジンを発行したり。確かに、インターネット以前と比べれば、今日では自分の意見を「見知らぬ誰か」に向けて発信することは格段に容易になった。が、それゆえにこそ、その他大勢の中で誰かに読んでもらうこと、そのために注目を集めるのはたやすいことではない。

ネットの記述、特に「掲示板」のそれなど、「便所の落書き」みたいなものだ、とよく言われる。私も、ほとんどがその通りだとは思う。けれども、中には、名ばかりの「論文」などより、よっぽど傾聴に値する意見や、鋭い視点に出会うこともある。（何かと評判の悪い、「2ちゃんねる」における匿名の記述にしても、「この人ほんとに分かってるな～」というようなカキコミを発見することも少なくない。）それら大量の「ゴミ」も含めた言説の山の中で、「記述」をしている「一ファン」たちにとって、例えば「論文」と称して発表したりされることは、頭越しで議論されているかのように感じられるのではないだろうか。「記述する」人は、「読む」人である。目にしてしまう機会も多かろう。アカデミズム

の記号は、意見を言おうと手を挙げている人が大勢いる中で、確実に「高下駄」として機能する。どこか、地球の反対側で、勝手にやっていてくれるならかまわないけど、なんだこれは、偉そうに。(もちろん、内容が、さすが「論文」だ、というのなら……)

アカデミズムの記号とは、具体例をあげれば、「所属」という(このような集まりで必ず名札につけることになっている)やつである。

ネットがこれだけ普及して以降、ポピュラー・カルチャー研究(に限らないけれども)を実践する時に、ネットの記述を「資料」としてどう取り扱うか、というのはかなりややこしい問題である。著作権の問題、代表性の問題、などいろいろと議論するべき課題は多いが、とくに資料としての「信頼性」をどう判断するかというのは、重要なものだ。ものすごく単純化していえば、「信頼性」の度合いによって、ネットの記述は、「参考文献」になるか、単なる「調査データ」扱いになるか、が分けられる。

新聞社などのマスコミ、有名人のものは当然別格。鋭い意見だなぁ、このジャンルの豊かさを示す「言説資料」として使えそう。「名無しさん」だから、これは当然「調査データ」。こっちはメアド書いている。けど、プロフィールないし「一般の人」だろう、「資料として使わせてください」とでもメールは出しておくか。この人は、おお、「本」を出している人か、やっぱりな。これは、ああ、あそこの大学の院生か。メール出して、良い資料ないかご教示願おうかしら。

「院生」という「所属」だって、十分にアカデミズムの記号として、機能を果たしている。

こういう私の「妄想」は、ものすごく単純化した描き方であることは、繰り返し言っておきたい。が、このように、「研究」活動、という行為とは、すなわち、アカデミズムという記号を権威として機能させるものであり、例えばアカデミズムという記号の意味が分かってしまいながらも、自身では「所属」はもっていないような「記述」したい「一ファン」にとっては、やはり、あまりいい気のしないものなのではないか、ということは確実に言えるのではないだろうか。

(また、ちょっと違った意味で「いい気のしない」「一ファン」のあり方も多いと思う。それは、「分かった人たちだけで楽しみたいのに、勝手に外部に伝えるな!」というような理

由による反発である。メインカルチャーでは、得難いコミュニティーをそれなりの広がりをもって作ることができるのが、ネット時代のサブカルチャーである。閉じているからこそ、楽しめる空間。外に知られたくはないのに、勝手に「研究」しやがって。だれがあんたに頼んだんだ、外部に伝えてくれって。ほっといてくれ。「研究対象」って、私ら「病理現象」か。——というような。)

ここまで述べてきたことを、別の言い方にすると、私は、「ポピュラー・カルチャー研究者」として、アカデミズムという記号を、本来持つべき権威あるものとして素直に使えない気持ちがある、ためらいがある、ということだ。

広い意味で、文化を研究するというとき、いわゆるその「研究方法」の源流は、文化間の情報格差、ギャップを前提にしたところにある。初期文化人類学なら「文明」から「未開」を、社会学なら「知識人」から「大衆」を、シカゴ学派の都市社会学なら「大学」から「移民街」を、民俗学なら「国民」から「常民」を、見て記述するということから始まった。「あちら」の常識は、「こちら」の非常識。そういうギャップがある関係では、とりあえず、「あちら」から「こちら」へと、情報を伝えることにはそれなりの価値／意味があっただろう。少々誤差があろうが、少々偏見がまじっていようが、帝国主義の手先であったのであろうが、その遺産を私たちは、やはり継承しているのだから。

だが、ポピュラー・カルチャーの場と、アカデミズムの場との間にあるギャップというものは、これまでの「文化の研究」におけるそれと比べるとき、あまりにも小さな、ほとんどゼロに近いものなんじゃないか、という思いを私は抱いてしまうのである。

ポピュラー・カルチャーの多くは、若者文化である。アカデミズムの場である大学が、そのまま、その文化の場であることも多かろう。「読み」「記述する」人も多く参加している。互いに行き来が容易だ。ましてや、「一ファン」が「研究者」でもあるとすれば。そんな「近い」ものを「研究」するのに、「フィールドワーク」や「面接調査」だなんて、このような出自の「方法」をそのまま使っていいのかしら。というようなことが気になったりもするのである。(と、言っても、他に「方法」が考えつくわけではないから、気になるというだけ。「研究」という言葉は、仕方がないかもしれない。でもせめて、「面接」とか、「インフォーマント」とかは、やめませんか。「フィールドワーク」なんて言うのはやめて、「取材」とか、「話を聞きに行った」とかフツウの言い方したほうが良かないですか。単なる好みの問題かもしれませんが。というようなこともつい言いたくなるのである。閑話

休題――)

アカデミズムの場と、ポピュラー・カルチャーの場が、とても「近く」なっているということを述べた。これは、研究の「対象」が、近くなったというだけではない、と思う。

既述のように、アカデミズムの研究対象になることで、それまで、何でもなかったものが、「文化」になっていくということはある。アカデミズムは、権威付与機能を持つ。これは、私は、一概には悪いことだとは思わない。これまで述べたことと、一見矛盾するように聞こえるかもしれないが、アカデミズムは、権威を、その責任とともに持っているべきだし、バリバリのメインカルチャーとして、社会に「文化的豊かさ」をもたらすことに貢献すべきである、と考えている。それだからこそ、他のサブ(下位)カルチャー(文化)を、偉そうに記述したり、迷惑をかけながらも調査したり、勝手に分析したりしても、赦される、のだと思う。

けれども、本来なら、メインカルチャーの代表であったはずのアカデミズムというものが、特に「ポピュラー・カルチャー研究」(の類似分野)の場合、なんだか、サブカルチャーのような、もっとはっきり言うと、短縮形の「サブカル」的な場となってしまっているのではないだろうか。

私は、昨年[*4]、某大学で文化の社会学というタイトルの講義を非常勤で持つことになった。そこで、やはり最新の研究成果に近いものにふれてもらおうと(十分な理解もできていないのに)、カルチュラル=スタディーズ(以下カルスタ)の理論などを教えることにした。その時、新刊に近く、しかもメジャーな学者が参加しているというので、吉見俊哉さんが編著者の『知の教科書〜カルチュラル・スタディーズ』(2001、講談社)を、テキストとして指定した。様々な、カルスタの研究蓄積を、目配り良くコンパクトにまとめてあり、分かりやすい教科書だな、とパラパラ斜め読みしただけで判断し決めてしまったのだが(という時点で間違っているのだが)、開講近くになって準備のため頭から精読した時、ちょっと後悔した。よく見ると、とても説明しにくい記述がこの本の最初の方に出ていたからだ。

この本の最初の部分は、入門書らしく、カルスタという学問を学ぶことの意味について述べてあり、読者=学生をカルスタという新しい「知」に誘うような文章が続いている。

「実益でも教養でもなく」(p5小見出し)、そういう知としてカルスタはある。つまり一般的には、役に立たないし、評価もされないのだ、とあえて強調し、逆説的にカルスタの魅力を語るスタイルだ。

その中に、以下のような記述があった。

「(——前文略) しかも、CSは日本の教育システムのなかで制度化されていない。したがって、もしもあなたが大学院でCSの論文を書いていったとしても、それはあなたがどこかの機関で研究職のポストを得ることにはほとんどプラスに作用しないのだ。」[*5]

これを読んだとき、私は、とても嫌な気分におそわれた。他人が書いたことながら、何だか妙に恥ずかしい気分になった。こんなことを、どういう顔をして平気で書けるのか。とても信じられない。

カルスタ的な知見が、とりあえず、一般的な実業の世界において、なんら功利的役割を果たさない。それはいい。よくわかる。既存の伝統的教養というのともちょっと違う、というのも。私も、一応、カルスタを授業してみようか、と思うくらいなのだから、近年の大学生が、妙に、就職準備ばかりにせいをだし、まじめになり、「優」を取るために講義の出席率が上がっているという風潮などに対し、「それでいいんでしょうか」という思いを抱いている。役に立たない、けど、知的に面白い。そんなところがやっぱり自分の「趣味」にあってるからこそ、こういう学問を選択したのである。

が、「研究職のポストを得」られないって、どういうことだ。執筆者の皆さんが、皆、フリーターとか、非常勤の高校の先生とか、そういう身分で、しかもカルスタ研究に邁進している、というのなら、めちゃくちゃかっこいいだろう。が、裏表紙をめくって見るまでもなく、何人もの方が、ちゃんとポストを得ている。しかも、とってもご立派な、権威の固まりみたいな。「役に立たない」研究を、ちゃんと、役立つものにして、メシを食べている自分たちがいるのに、なぜこんなことが書けるのだろうか。

つまり、「自分たちは違うけど、君たちは無理」ということか。君たちには、カルスタは、本当に役に立たない。文字通り。でも、みんな、やりましょう——。

こういうの、有名ミュージシャンなんかが言いそうな、こんな言葉と似ていないだろうか。

「売れるのはごく少数。厳しい世界だ。だけど、みんな、気楽に音楽に触れようよ。音を楽しむって書いてあるじゃないか。」

その世界に参加する人、「一ファン」は、増えれば増えるほどありがたい。市場がふくらむ。「末端のアクター」(アマチュアミュージシャンなど)も増えた方が良い。成功がいかに難しいかが分かって、成功者の値打ちが上がるだろう。土台を拡げて、頂点を高くする。公園の砂場で、お山をつくる時のように。お笑いタレントも、漫画家も、やはり、成功者は同じようなことを言う。「教科書は、我々が書くから、君らは買って読んでね。」

そういえば、近年では、サブカルの世界でも、急速に学校化が進んでいる。ポピュラーミュージックの専門学校、マンガ・アニメの専門学校、そして、大学。DJの専門学校まであると聞く。長年、徒弟制度をとっていた、演芸の世界でも、吉本興業がNSCという養成学校を作って成功し、他の大手プロダクションも続々同様の学校を作っているのは周知の通りだ。

もちろん、これらの学校に行けば、誰もがプロになれるわけではない。ほんの一握りしか成功者にはなれない。一部の大学などを除いて、こうしたほとんどの専門学校等は、学費さえ払えば、まず誰でも入学できるのだから、当然のことだ。(宝塚音楽学校みたいなのは例外中の例外。)では、こういう学校は、どういう需要に対してサービスの供給を行っているのか。

一見華やかなサブカルの魅力にとりつかれた若者が、うっかり「自分もプロになれるんじゃないか」と勘違いしてしまう。だけど、どうしたらいいのか分からない。プロになりたい願望と、現実とのギャップ。そこに、需要がうまれる。学校に行けば、とりあえず、「目指している自分」という気分は味わえる。同じ「趣味」を持つ仲間もできるし、少しは「業界」的雰囲気も感じられるかもしれない。

誰にも認めてもらえない中で、コツコツと、マンガを描き続ける。自分が取り組んでいることの「意味」を証明するものを何一つ持たず、コツコツ音楽活動を続ける。トークの技術を磨く。しかも、プロを目指して。「生活」は維持しながら。これは、本当に厳しく、孤独な過程であろう。そんな中、とりあえず、「学生証」を発行してくれて、「何をやろうとしている人」か、を証明してくれる学校が存在するのだ。かくて、そのような学校の経営は「商売」として成立する。

では、「卒業生」をどうするか。そんなことは気にしなくていい。勘違いしていた生徒たちも、たくさんの同じ志望を持つものの中に入れば、やがて、皆、自分の限界に気づく

ようになるだろう。自然淘汰されて。そう、理解のある「一ファン」の誕生である。何年かに一人くらい、まぐれで、本当に成功する人が出れば儲けもの、格好の広告塔になってもらえるだろう。

アカデミズムの記号は、誰にでも手に入れられるものかどうか。その判断は、やはり難しい。今日、高等教育を受ける人が、およそ同世代人口の半分。そもそも、アカデミズムというものが、自分の関わる可能性のある場として、意識にのぼる可能性がある人が、そのうちの何割（何分、何厘くらい）か。その人が、例えば、このカルスタの教科書を読んだり、「研究成果」に触れたりして、その面白さに魅惑され、切れ味鋭い言説をバンバン生産している有名な学者に憧れたりして、自分も、そうなりたい、と勘違いしてしまったとする。（ここまでの、「自然」に見えてしまう選別過程は、また別に、マジメな論文で、議論すべきことだろう。階級、資本つまり家庭の事情、そして、文化資本、等々、さまざまな要因が重なって、そういう「なりたい」人が生まれるまでの問題は、とりあえずここではおく。）

で、その人は、どうすればいいか。「プロデビューは難しいぞ」。分かっている。でもやりたい。それなら、大学院に行けばいい。さすがに吉見さんである。うそは言わない。「ほとんどプラスには作用しない」と、「絶対」とは書いていないではないか。現に、自分の好きなポピュラー・カルチャーを研究したりして、ちゃんと食べている人も、少数ながらいる。もし「CS」を「専攻」するにしても、確かに今は「制度化」度は低いかもしれないが、その途上にあることは分かる。そのうち、ポストとやらも増えるかも。だって、もっとも権威のある大学の先生が、日本の代表なのだから。東大社情研というNSCもあるし、阪大人科という松竹芸能養成所でもいいじゃないか。とりあえず、評価されたり、研究活動をしたりできる場は、探せばある。探しても何処にもないような、本当に全く制度化されていないようなものに、教科書があるなんてことはありえないのだし。

そう思った人にとって、大学院への進学は、それほど難しいことではないだろう。文部科学省の方針もある。国立大学だって独立行政法人になり、学生を増やそうとしている。不況で、失業者を減らすのに大学院進学者をふやそうとしているという話も聞いたことがある。ほんとかどうか知らないが。そして、なりたいと思った人が、すでに、ある程度の「自然淘汰」を経た結果のものであることを考えれば、なおさら、それほど、難しくは、ない、だろう。たぶん——。

大学院に行けば、いろいろなものが手に入る。研究を発表する機会が与えられる。「所属」というアカデミズムの記号。高下駄。そして、「研究する私」も。もちろん、「業界」にとっても、こういう人が増えることは、のぞましい。とりあえず、「読者」は増えるのだから。

アカデミズムという「サブカル」が、隣の「サブカル」を、研究し、記述し、調査し、分析する。「記述する側／される側」を、研究という行為によって、分ける。そんなイメージが、私にはあるのだ。大した権威でないからこそ、研究によって、小さなレベルで権威を作っていく。「ちょっと上のサブカル」を目指して。というような。

研究することが、政治的であることなんて、もちろん、分かっている。と、ポピュラー・カルチャー研究者は言うだろう。だから、権威的に振る舞わないように細心の注意を払う。「誰が、どこで、どのような政治的文脈で語るのか」を意識して。そして、既存の権威的な教養の枠組み自体を疑い、メイン・カルチャーと、サブ・カルチャーを、分け隔てなんてしない。これまでは、学問の対象にならなかったようなジャンルを、積極的に研究していく。
(――そのようにして、アカデミズムが、アカデミズムとして振る舞える場所を、拡げていく。)
いや、だからこそ、例えば、「『アカデミズム』と『現場』とをつなぐ」ことを考えているんです。同じ地平に立って、協力しあいましょう。「アカデミズム」は、決して、特別な、権威的な場所ではないのだから。
(――そのように、「つなぐ」ということで、「アカデミズム」と「現場」の二つを分ける。)

「アカデミズムは『現場』なんてわからん」、と言う方が、まだスカッとしないか。と思ってしまうことが、私にはある。決して、ほめられた態度ではないのは言うまでもないが、権威として、ずん、と上から覗きこむ方が。そうすれば、「現場」は、大声で叫べるだろう。「何も分かっちゃいない。事件は現場で起こってるんだ！」と。「つなぐ」なんていうことは、そのセリフを言う権利まで、「アカデミズム」が奪ってしまうことにならないか。

「分かってます、事件は『現場』で起こってるんでしょ。分かってますよ。こっちは『現場』

が見えてないんでしょ。それも分かってます。分かってますよ。だからつながりましょう。では、最初に、そちら『現場』からのご意見をどうぞ。」

4.「『おいしい（研究）生活』みたいな感じ？」というイメージ

大学院に入れば、とりあえず、参加できるように見える、アカデミズムという場が、「サブカル」のようなものになっていると述べた。「サブカル」の学校化を事例にして説明したのだが、もちろん、そのような現象が起こる遙か以前から、大学院を入り口にしたアカデミズムという制度は存在してきたわけである。あくまでも「サブカル」の側が、学校というシステムを導入しはじめたのであり、その逆ではない。いわゆる高等教育の大衆化や、そして、これだけの規模の「サブカル」の場を抱えこむことを可能とした全体社会（科学技術、メディアも含めて）の変容が、アカデミズムというメインカルチャーを「サブカル」的なるものへと変質させてきた、と言えるかもしれない。

また、有名学者に憧れ、その研究の道に進み努力を重ねる人が増える、ということは、もちろん悪いことであるはずはない。そもそも学校とは、「先生のような立派な大人になりたい」と、生徒に思わせることを、至高の目的とするシステムであるのだから。（元ヤンキーの先生は、最もすばらしい学校教育の成功事例だ。）

例えば、ノーベル賞を、どこかの物理学者が受賞する。それに憧れて、物理学志望の学生が増える。そして、物理学に参加する人の層は厚くなる。活性化する。もちろん、ほとんどの人は、ノーベル賞どころか、普通の物理学者になることもないであろうし、一流企業の研究所など、資金や権威の集まる場所に関与できるのも、勝ち残った少数派にすぎないだろう。多くの人は、それなりの場所で、いわば「一兵卒」として、物理学が関係する場の下支えをすることになる。

だが、理系の多くや、いわゆる実学系の学問分野の場合には、「一兵卒」と言っても、その場に歴とした有用の「アクター」として参加することになっている場合が多い。そういう肯定的自己イメージを持って、場全体の持つ目的に奉仕する役回りを演じることが可能なのだ。「サブカル」学校のように、一握り以外は、皆、「一ファン」という「消費者」になるということはないのだ。「役に立つ」学問とはそういうものである。それが、何もかも良いことだとは言わないが。

多くの非実学系文系学問分野の場合はどうか。ポピュラー・カルチャー研究（特にカルスタ的視点を持った）が、その枠組みを問い直したりしているような、大文字の「文化」に関わるものの場合は、とても分かりやすい。その知識で食べていけるかどうか、とか、一握り以外の、その知識を直接役立たせられない学生はどうするか、などという疑問を持つ必要は、はじめからない。なぜなら、伝えるべきものは、あらかじめ、伝える「価値」のあるものとして保証されている（と考える）のだから。役に立とうと立つまいと、学生がどうなろうと、関係なく、伝えること自体に「意味」があるのだ。

では、ポピュラー・カルチャー研究のような、「役に立たず」、かと言って、あらかじめ伝えるべき「価値」があると保証することそのものを否定する学問の場合にはどうなるのか。実践していることの意義は、とりあえず脇に置いておくとすれば、ほとんど「サブカル」学校と同じようなありかたとなるのではないか。

学んだ知識を直接、食べるために「役に立たせる」ことができない、その他大勢は、それぞれの「現場」で、批判的な視点をもって、身近なポピュラー・カルチャーに関わってほしい。日常的実践だ。糊口のための仕事は、ちゃんとやりながら。そういう、「現場」での小さな変化の積み重ねが、何より重要なのだ——。
「現場」での日々の活動の中で、ちょっとした変化をもたらすために努力するのが、どれほど、孤独で、難しいことか。いわゆる日本的世間の中で。誰にも評価されずに。で、そういう人たちが、少数の「成功者」の、本を読んだり、講演会を聞きに行き——。役に立たない知識で食えている人を支える。

たぶん、「そういうもの」なのだろう。それでいいのだろう。いくら、「既存の教養の枠組みを疑う」学問であるとはいっても、既存の教養体系の中で、権威ある地位について、衣食足りて、ゆっくり研究できる人がいなければ、その学問は発展しないのだろう。それでいいのだろう。それに、「知識」を学んで、後悔する人なんていないのだから、何らおかしいことはないのだろう。それで、いいのだろう。きっと。

（もちろん、現実には、いわゆる文系の大学生のほとんどは、アカデミズムになんて少しも煩わされることなく、それでも「卒業論文」を書いて、さっさと卒業していく。だから、こんなことは、全く考える必要はないのかもしれない。それに、上記のような「参加し

てしまった」人たちは、「一ファン」として、「読者」であることに満足しているだろうし、「先生」の新刊が出るのを心待ちにしているだろうから、とやかく言う必要はないのだ。うっかり「大学院」に進学した人たちは、もちろん、「厳しい」ことは聞いてきているのだから、覚悟ができているか、もしくは、「家庭の事情」で余裕があるのだろうから、ほっておけばいい。前述のように、メリットもたくさんあるのだし。)[*6]

最後に、このような「参加してしまった」人たちの外部、いわば「一般の人」たちに対して、ポピュラー・カルチャー研究のような「役に立たず」「価値も保証されていない」学問の、「役に立たせ方」「価値」を、説明するとき、それはどのようなやり方をとることになるか、について、気になることを述べておきたい。

多くの聞き手、読者を獲得する努力をすることは、どんな学問でも必要なことだ。「真理は万人によって求められることを自ら欲し」[*7]ているとはいえ、将来の「読者」候補への呼びかけは行わなければならないだろう。大学でも、それなりの数のリクルートは、し続けなければならない。ある程度の制度化も目指さなければならない。それを全く求めないというのなら、本当の意味で「サブカル」として、アカデミズムなんて看板をおろし、分かる人だけ分かる、コミュニティーを作ればいいのだから。

外部の人たちにどうやって、これら、「役に立たず」、伝える「価値」が保証されていないようなものの重要性を認識してもらうか。できるだけ分かりやすく、しかも、誤解を生まないような表現で、分かってもらうようにするというのが、その基本姿勢でなければならないのは、言うまでもないだろう。

ポピュラー・カルチャーのような、身近で、誰でもよく知っている、すぐそこにあるものの研究なら、なおさらのことだ。でも、実際は、どうか。

グローバリゼーション、ジェンダー、エスニシティ、ポストコロニアル、ヘゲモニー、オーディエンス、ディアスポラ、サバルタン、トランスナショナリティ、クイァ、セクシュアリティ、カルチュラル＝スタディーズ——

言うまでもなく、ポピュラー・カルチャー研究でよく使われる専門用語である。

これらの、その一つ一つをとってみれば、誠実な、時には命がけの、問いの継続の中か

ら、ある必然性をもって生まれてきた、概念、言葉。しかし、その「歴史」を、「内容」を、とっぱらってしまって、たとえば、こうして並べて眺めてみれば、なんとなく「意味」ありげで、ちょっと気の利いたキーワードの束に見えてもくる。

横文字だけ選んで挙げたからか。では、次のようなタイプのものはどうか。

ゆらぎ、きしみあい、せめぎあい、越境する、縫合される、横断的な、開かれた、〈知〉、〈いのち〉、〈出来事〉、〈身体〉、〈日本〉、——[*8]

これらは、なんの変哲もない、普通の日本語の言葉ではある。飾り括弧をつけたり、ひらがなで表記したりすることも、その一般的な意味との距離を作り出す、異化作用を生み出すための必然性があることも、まぁ、分かる。

だが、これら、ポピュラー・カルチャー研究でよく見かける言葉が、ある具合で配列されたとき、引き出される「気の利いたもっともらしさ」のイメージが、私にはどうしても気になって仕方がないのだ。もちろん、これらの言葉・言い回しを、時に自分も使用するし、使われ方によっては、まったく目障りじゃないこともあるけれど。それでも、どこか、胡散臭い。

伝えにくい研究の「価値」を、とりあえず、それらしく見せるため、これらのキーワードが、ならべられているだけなのでは——。情報の価値を高めるため、「あっち」と「こっち」との本当は極小の距離を拡大して見せるために、このような言葉の数々で、装飾しているだけなのでは——。データの分析、考察と称して。というようなことを、考えてしまうのである。

これらの言葉の使われ方、期待されている演出効果。ここに、私が感じてしまうのは、いわば「広告代理店的手法」の匂いである。

「インターフェイスの人文学」——「イメージとしての〈日本〉」——何となく意味ありげで、気が利いているが、具体的には、どういうことか、なかなか理解しにくい、このような「コピー」。

今日、ポピュラー・カルチャー研究が対象とする領域で、特に、マスメディアという空間において、電通を代表とする広告代理店が、どれほど重要なエージェントとして働いているか、あらためて指摘するまでもなかろう。

ネット時代になってもやはり、最大の影響力をほこるメディアであるテレビ。その中で広告代理店は、番組作りに、視聴率という指標を振りかざして、絶対的な力を行使している。五輪など、スポーツへの関与も無視できない。近年では、選挙戦略にも大きな役割を果たしている。およそポピュラー・カルチャーとよばれる諸領域において、広告代理店の息がかかっていない場所は、ほとんどないと言えるほどだ。

広告代理店的手法とは、何もない（かもしれない）ところに「意味」のイメージを発生させ、受け手の欲望を作りだす技術である。嘘をホントに、しかもオシャレに、意味ありげにみせるのが、広告の仕事である。商品を売るために。

そのような技術に対して、アカデミズムの中で、最も鋭い批判的視角をもてるはずのポピュラー・カルチャー研究が、まるで同じような手法を使っているとしたら。しかも、アカデミズムの中でも最も意識的に、使っているとしたら。それは、やはり、ものすごく罪が重いことなのではないか、と私は思う。

先に述べた、「サブカルとしてのポピュラー・カルチャー研究」というイメージとも親和的な、「アカデミズムの中の広告代理店」というイメージ。

このようなイメージは、何ら実態を伴わないもの、ではないと思う。例えば、大学生の中で、電通などの広告代理店に勤めてみたいと考える人は、どのような学問を選択することが多いかを考えてみてほしい。

最近では、新聞記者などの報道の仕事に就きたいと志望する学生と、広告代理店志望の学生は、とても近い存在になっているのではないか。ジャーナリズムと、コマーシャリズム。「本当」を伝えるべき仕事と、「嘘」を「本当」として伝える仕事。本来なら、真反対の社会観、人生観を根っこにして、志望する気持ちが生まれるはずのものではないか。その両者が、いわゆる「ギョーカイ」志望として、近い、いや、ほとんど重なるところにいる。やはり、これはまずいことなのではないだろうか。

そんな、「ギョーカイ」志望の学生こそ、ポピュラー・カルチャー研究に楽しみを見出し、「なかなか面白い感じの卒論」を書くようなタイプの人たちではないか。「電通落っこちたから、とりあえず大学院にでも行っておくか。」共通するのは、とりあえず、「送り手」側にまわりたい、という気持ちぐらいだろうか。送る「内容」は、後から考えればいい——。

*　　*　　*

多くの「一ファン」がひしめきあっている中で、権威を使って、偉そうに、調査し、発表する。「ほっといてくれ」と思っている人たちを、記述し、傲慢にも分析してみたりする。そういうことが、赦されるとしたら。それでも、アカデミズムは、アカデミズムとしてそういう資格があるのだと言えるとしたら。それは、アカデミズムが、この高度消費社会の中で、もっともらしいイメージの氾濫にながされず、本当に「意味」あることを記述するという責任を果たせばこそなのではないか。

「売れるかどうかなんて気にしなくてもいい。」これが、この社会の中に数ある、情報の「送り手」たちの中で、アカデミズムだけが持っている最大の「売り」だったのではなかったか。そうでないなら、「研究」なんていう言葉を使うのはやめて欲しい。少なくとも、私が愛着をもつ、カルチャーの場にだけは来てくれるな。と「一ファン」としての私は思うのである。

5. 終わり

「ポピュラー・カルチャーを研究してます！ 対象は自分の趣味です！」と、私が「本当のこと」を言いにくいのは、以上のような「イメージ」が、何となく気になるから、ということになりそうである。もちろん、あえて言うとするならば、のことではあるが。

(6. 2年後に記す補足)

以上のように、本稿は、あくまでも議論のための自由な問題提起として書かれたものである。ワークショップ（以下WS）（注1参照）では、参加者にこのDPをあらかじめ読んできてもらい、議論を行った。本WSは、「イメージとしての〈日本〉」研究プロジェクトの、中間的総括の意味もこめて設定されたものであった。当日は、つたなくひとりよがりな「挑発エッセー」に対し、多くの参加者に真摯な応答をいただき、有意義な議論をすることができた。その意味では、本稿の役割は、WSの日をもって終わったというべきであ

ろう。

しかしながら、WSの際の議論で、何らかの「答え」が出たわけではない。アカデミックな研究対象として、ポピュラー・カルチャーを考えることの意味は何か。また、今日の社会において、文化を研究するとは、どのような実践なのか。このような根本的な問いは、継続的に何度も議論し直していくことが必要なものだと思う。

学術論文を主体にした報告書には相応しくない文体で書かれた文章ではあるが、WSでの議論に参加していた複数の方々に推薦をいただいたこともあり、あえて当初の文体のまま掲載することにした。

論理の飛躍等、いろいろな点で読みにくい部分があると思うが、ご寛恕願いたい。

［ふるかわたけし・大阪大学、関西大学他非常勤講師］

［注］

1――― 本稿は、2004年9月26日に開催された「イメージとしての〈日本〉」若手研究者交流ワークショップにおいて発表した際に準備したディスカッションペーパー（以下DP）を掲載するものである。（誤字脱字、ならびに一部分かりにくい表記については修正した。）学術論文形式ではなく、いわゆるエッセー形式で書かれている。当初のDPには、注をつけていない。このような形式で作成した経緯や意図などについて理解いただくため、本稿には適宜、注を補足した。また、本稿の末尾に、簡単な解説も付加した。

2――― このDPは、「文化研究の困難」というテーマの部会において発表された。筆者には、議論のための問題提起の役割を求められていた。

3――― ポピュラー・カルチャーをテーマにした筆者の主な研究活動は以下を参照してほしい。古川岳志, 1998,「競輪の変容過程～競輪から見たギャンブルとスポーツの関係」『スポーツ社会学研究』6:84-96., 2002,「大衆文化としての力道山プロレス」岡村正史『力道山と日本人』青弓社, 143-176.

4――― 2003年を指す。

5――― 上掲書p7、吉見氏の文章。引用文中CSはカルチュラル・スタディーズをさす。

6――― ここと、一つ上のパラグラフは、判断停止のまま終わらせてしまっている。

7――― 岩波茂雄による「読書子に寄す―岩波文庫発刊に際して―」より。

8――― 大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」公式サイトから集めた。

「イメ日」班における方法論の実験報告
—研究ネットワークの構築のために—

真鍋昌賢／伊藤　遊／山中千恵

はじめに

イメージとしての〈日本〉(以下「イメ日」) 班は、ポピュラーカルチャーの領域を対象とし、イメージの流れに注目することで、これまでとは異なる方向から、人文学、社会科学の問題を発見し、検討することを試みた。その成果の一部が、前章までの論文としてまとめられている。

私たちは、問題を発見し、答えを模索、検討すると同時に、その営み、つまり「研究」の進め方そのものにも目を向けてきた。研究を①「どのように進めていくのか」というプロセス、②「なにをもちいて進めていくのか」というメディアへの注目によって、研究を成立させる場や作法を問題化し、領域横断的な共同研究のあり方を模索してきたのである。

そもそも、ポピュラーカルチャーという領域を扱う上での、「正当な」学術的手続きは未だ存在しない。私たちは、ポピュラーカルチャー研究を、自分たちの存在を含めた文化経験それ自体を対象とするものであり、音楽、映画、ドラマ、マンガなどのメディアテクストはもちろんのこと、作品を人々が享受するその経験と、経験が生起する場をふくめた問題としてとらえることだと考えてきた。そこでは、学術領域内の横断、アカデミズムとその外側との横断が必須条件であった。ゆえに、イメ日は「横断のことば」を模索し、「方法」の実験を繰り返してきたのだといえる。

本章では、イメ日の活動において、これまでどのような方法を「実験」してきたのかを報告したい。そして、このCOEのプロジェクトを基礎に始まったいくつかの共同研究についてもふれ、イメ日の活動が今後どのような広がりを持ちうるのか、その展望を示せたらと思う。

(山中千恵)

1 ディスカッション・ペーパー

過去4回開催された「若手研究者交流ワークショップ（WS）」は、「ディスカッション・ペーパー（DP）」方式を導入している点を大きな特徴とする。

この方式における最大の利点は、「発表者」の書いたDPを参加者にあらかじめ読んできてもらうことで、WS当日、議論に多くの時間を割けるということだ。DPは、議論のためのペーパーである。誤解を覚悟で言えば、ペーパーの作者は言わば“ネタ提供者”である。ゆえに、参加者同士の関係性は、しばしば通常の学会発表でみられるような「1人の発表者対（ある1人の）聴衆」という単線的かつ並列的なものではなく、その場にいる全員がDPを素材に有機的議論を展開させ得る「対等なディスカッサント」ということになる。

もっとも、DPは、1回のイベントのための単なる“ネタ”に終わるものではない。2003年度のWSでは、議論のフォローをどうしていくか、というモデルづくりの実験も行った。DPというのは、いわゆる「論文」のように完成されたものではないというのが前提となっている。ペーパーの筆者には、WS当日の議論をもとにリライトしてもらい、当日のコメンテーターがそれにコメントを付ける。そして、そのリライターには、WSで議論が行われたという“しるし”として、一枚の「表紙」を配布した。「表紙」が付けられたDPは、さらに別の場所でもDPとして議論されていく……ということが繰り返される。重要なのは、DPが議論され書き換えられていく度に、どのような場でどのような箇所がどのように議論されたかという「議論の履歴」も（更新されながら）付されていくという点だ。DPの読者は、この「履歴」を読むことで、これまでの議論を参照しながら、はなしを展開させることが可能になるだろう。

もちろん、議論がある程度熟してきたと思ったら、いわゆる通常の「論文」として、学会誌などに投稿してもらって構わない。ただし、「論文」になってしまったからと言って、議論の“旅”が終わるわけではない。それはまたDPという形で議論されることで、さらに変化していく可能性を永遠に持ち続けるのである。

ここには、「正しいコミュニケーションの技術」とは、あらかじめ持っているある確固とした考えを他者に十全に伝えることではない、という前提がある。私たちはWSというものを、自分たちが変わっていくあるいは変えていく現場として構成してきた。次に紹介する「インスタレーション」を使った共同発表もそうした観点に立って行なわれたもので

ある。（伊藤遊）

2 インスタレーション

2－1 “表現”したかったこと ——拡散する〈日本〉イメージ

2005年3月4日～5日、モナシュ大学（オーストラリア）日本文化センターとの共催で、国際シンポジウム「Imagining Japan」を行った（於モナシュ大日本文化センター）。次に、その際に行われた5人によるグループ発表[*1]におけるプレゼンテーションの実験について紹介したい。

このグループ発表におけるそれぞれの報告は一応独立したものである。しかしながら、ここで重要なのは、それぞれのイシューが有機的に連関しあっていることを自覚していた点である。むしろ、連関として描かれるテーマそのもの——「越境するポップカルチャー、奪用される〈日本〉」をみせたいというのが、当初からの目的であった。

そこで私たちが目指したのは、それぞれのペーパーにおけるイシューの有機的連関の全体像が、我々の研究対象としている「〈日本〉イメージ」そのものの捉え方と重なるということの“表現”であった。ただしそれは、単に複雑化した問題系をビジュアルの力をもって整理するということではない。というのも、ここで私たちが示したかったのは、「実体」としての日本ではなく、発信と奪用が交錯する「イメージ」の拡がりだったからである。私たちの発表が最終的に、介入可能な「インスタレーション」という“モノ”として提示されたり、事後アンケートとしてオーディエンスの「〈日本〉像」を描いてもらったりしたのは、その点にこだわりたかったからなのだ。

その結果考案されたのが、私たちが「インスタレーション」と呼んでいる議論ツールである。これは、3×3mの模造紙に、「日本のポピュラーカルチャーのグローバリゼーション」というテーマに沿って書かれた、共同発表者5人のペーパーのキーワード（例えば、「アニメ」や「著作権」や「反日」といった。）が並べられたもの。各発表者は文字通りこの「インスタレーション」の中に入り、キーワードをカラーペンでつなぎながら、そのつなげ方を解説する形で自らの議論を展開させた。5人の発表が終わった時点で、バラバラに見えた5つの議論とキーワード同士が有機的につながっていることがわかる、という仕掛けだ。

（写真）

そこでは、まずもって、言語の異なる人たちと議論するため、コミュニケーションツールとして、ビジュアルの力、身体の力を借りようということがあった。そして、この装置のさらに重要な機能は、オーディエンスもこのインスタレーションの中に入って、キーワードとキーワードを自分なりの説明を付けてつなげなおしたり、足りないキーワードを付け足したりできるという未完成性にある。その際、これが身体性を取り込んだアナログ装置であった点は重要だったと思う。（一方で、同様の書き込みはA4用紙のアンケートにおいても行われた。）

ここでの私たちの目論見は、書き加えられ展開していく文字とキーワード同士を結ぶラインの修正と増殖のあり方が、ポップカルチャーを介して展開している「イメージとしての〈日本〉」そのものをビジュアル的に表現するだろうということであった。

「イメージ」とは、様々な出会いのレベルによって科学的な反応を起こし、変容・増殖していくものであるが、この「インスタレーション」方式では言わば、研究対象の動態を、研究現場のコミュニケーションツールそのものとして展開してみたわけである。そこには、「ポピュラーカルチャー」を「生きる」／「研究する」主体の不可分性という感覚の共有があるように思う。

2−2 メディア・ラボとのコラボレーション

こうした実験をするに当たって、私たちの身近に、「メディア・ラボ」のスタッフがいたことは、非常に幸運なことであった。「メディア・ラボ」は、アカデミズムにおける新しいメディアのあり方を「研究者」と共に考えていくことが期待されている、当COEの重

要なセクションのひとつである。メンバーは、いわゆる「研究者」とは異なる出自の人たちであるが、「モノづくり」の実績を持っていた。

私たちは、早い段階から、ラボのスタッフと議論をし、どのようなプレゼンテーションがありうるかを考えた。このペーパーを読むと、「研究者」である私たち5人の中であらかじめ“表現”したいことがあって、その“器”＝メディアをラボ・スタッフに発明してもらったかのように読まれてしまうかもしれないが、実のところ、プレゼンテーションのあり方についてラボ・スタッフと議論する中で再認識したことが、このペーパーの一部として、遡及的に述べられているという面がある。私たちの“コラボレーション”はそれほどまでに緊密であった。そのことはまた、プレゼンテーションという「メディア」がその内容と分かちがたくある研究分野のあることも示している。

2－3 反省

もっとも、この発表が、ここで述べてきたような理念を十全に実現し得た例であるとは言いがたいのも事実である。5人の発表者と3人のラボ・スタッフの間（あるいは、5＋3人の個々人の間）にも溝が存在し、その溝の一部は結局最後まで埋まらなかった。例えば、こだわりたい部分の差——パッケージングのビジュアル性そのもの／テクストで示せるような内容、といった——は、お互いに、最終的な「インスタレーション」の出来にどこか不満を抱いているという結果を残した。

こうした問題を詰めることができなかった結果、私たちの意図がオーディエンスに充分伝わらなかった部分も出てきてしまった。オーディエンスからは、私たちが、〈日本〉イメージを考える際のひとつの例として取り上げたトピックの不足や解釈そのものに対する批判が相次いだ。私たちがこの発表で伝えたかったのは、〈日本〉を論ずるということは、〈日本〉に関するトピックが次々と想起されそこに様々なイメージが重ねられていくこと——「拡散する〈日本〉イメージ」それ自体を論じたかったのだし、ここにいる「発表者」である5人もその「オーディエンス」もその「イメージ」を生産し得るという意味では同じ地平に立っているということを“表現”するためのインタラクティヴなインスタレーションだったはずだったのだが。こうしたズレは、それを楽しみ議論の端緒となることを期待したのにも関わらず、単に羅列されるに終始してしまったのである。こうした誤解を生じさせてしまったことは、このプレゼンテーションのひとつの致命的な欠点ではあった。

また、アンケート回答も含めた、オーディエンスの反応にさらに答えていくようなシステムについても加味していく必要があるだろう。（伊藤遊）

3 二つの課題

3-1 メディアとしての「声」

方法論の再設定を試みていくことは、「研究」という営みそのものを自明視しない立場につながっていくのだろう。その意味において、メディア論と研究方法論の接合は人文学における重要な課題である。「研究」という対象との関わり方を構造化している無意識のツールについて自覚的であろうとし、またそこにはらまれた拘束性を明るみに出すことが意図される。ここでいう「拘束性」とは、何がどのように、見えるのか／見えないのか、聞こえるのか／聞こえないのか、あるいは感じ取られるのか／感じ取られないのかをゆるやかに制限する前提条件を指している。ここまで述べてきた方法の発案／試行とは、いずれもそうした「研究」の「拘束性」を“一端”解き放ち、新たな「研究」空間をプロデュースするという側面をもっていた。

これまでのイメ日班で重要であった特徴の一つは、非言語的側面（画像・身体・モノ）に対する注意喚起に重点をおきつつ、方法論についての議論に取り組むことであった。その一方でわれわれは、文字としての言葉を相対化するうえで、「声」としての言葉の位相を、改めて考えてみる必要性を感じている。その背景には、送り手／受け手のあいだを、よりインタラクティヴな関係として動態的に演出するうえで、「声」の力が大きいのではないかという思いがある。イメ日班では、対面的な空間のプロデュースに力を注いできたが、一貫して「声」が生まれ交わるダイアローグの現場を、「研究」という営みのなかに位置づけ直そうという試みであったともいえる。たとえば、先に述べたようにディスカッション・ペーパーとは、論文を単一の声による創造物ではなく、多声的なテクストとして今一度見つめ直し、声の交差する口頭発表の現場の意義を再設定するための方法であった。コミュニケーションの全体像、あるいは様々なメディアの力学を無視して、「声」のみ独立して剔出できるわけではない。しかしながら、「声」について自覚的であることが、研究の諸相、つまり問題発見・調査・議論・発表などのインターフェイスを考えていくう

えで、カギのひとつとなることは確かであるだろう。

「声」には時と場所に限定され、発話者のリアルタイムなイントネーションが、あるいは発話の方向性が刻印されている。「声」は「文字」に比べ少数の受け手に、しかも至近距離にしか届かない。「文字」は「声」に比べてより反省的に身体から切り離される。また「文字」は部分と部分の比較がしやすく、同じ部分を繰り返し検討できるとみなされる。近代的な学問生産の評価システムのなかで、「文字」に比べて二次的な位置に位置づけられたに見受けられる「声」を、「研究」という営み＝プロセスにおいて、しかも現実的な実践の現場において、人文学研究者はどのように再設定すべきかについて今後も考えていきたい。

（真鍋昌賢）

3－2 何のためのネットワークか？ ——「ワークショップ」

私たちの方法論の実験は常に、人的ネットワークの構築ということを念頭においたものだった[*2]。それは結果だけでなく、プロセスこそを重視するということである。

しかしながら、しばしば批判されたように、後者ばかりを強調することで、研究的な結果がみえなくなってしまうという恐れはある。

例えば、私たちはネットワークづくりの戦略として、すべての研究イベントを「ワークショップ」と称してきた。しかしながら、この方法は、人と人が出会う現場の構築にばかり気を取られてしまうことで、「ワークショップのためのワークショップ」という自家中毒的悪循環ができてしまうという危険性がある。私たちにもそうした傾向があることを少なからず自覚しているし、そうした例を、ここ数年で研究の世界でも一般化しつつある「ワークショップ」の中にいくつもみてきた。本来外に開いているはずのワークショップが、その場の空気を知った者にとってのみ意味のあるイベントとなってしまうのだ。

ワークショップというやり方の原点には、対面的な出会いを通して、自分自身の身体や感情というものを（再）発見するという発想がある。これは、この方法が、近代社会に対するある種のカウンターカルチャーの中から出てきたことと無関係ではない[*3]。しかし、こうしたカウンターカルチャーが、社会の変革ではなく自己意識の変革に傾注していったことで多分に自己完結的な文化になってしまったように、ワークショップという方法も参加した人だけが何かを得るという閉鎖を生む危険性を持っていることは自覚しておくべきだろう。

（伊藤遊）

おわりに ——新たなフィールドにむけて

なお、われわれの発案／試行は、イメ日班で得た知見をふまえて、それを継承する各プロジェクトにおいて続行中である。

まず、「イメージ」研究のさらなる前進を目指して結成されたのが、「映像社会学研究会」（以下映社研）である。映社研では社会学が研究対象／手段としての映像を扱う際の方法論を、資料のアーカイブ化、教材化を念頭におきつつ検討している。映社研の活動は映像を扱うことによって、文化社会学がどのように自らを刷新できるのかという問いにも支えられている。大阪市立大学URCアーカイブスプロジェクト、京都精華大学とともに協力関係を結び、国際シンポジウム「ムービングイメージと社会」を既に2006年11月に開催した。

次に、伊藤遊（民俗学）、山中千恵（社会学）が、加藤健介（社会心理学）、谷川竜一（建築史）、東園子（社会学）、清水良介（情報デザイン）らとともにとりくんでいる「音＋マップ」研究会（以下マ音（な）研）を紹介しておこう。マ音研は、都市を読み解くこと自体を楽しむ、人文学的な試みを提案する研究会である。近年、建築学、社会学、民俗学などの各分野で、都市をフィールドとし、そこに住まう人々と共に都市を歩き、空間を読み解き、その成果を共有するような研究スタイルが再発見されつつある。マ音研は、これらのエッセンスを引き継ぎながら、学問の領域を超えて研究者が出会い、自己が依拠するディシプリンを見直すなかで、都市を読み解く技法を共有していく試みとして企画された。現在作成しているのは「音声マップ」である。美術館や博物館の音声ガイドの「都市版」といえばわかりやすいだろうか。しかし、美術館のガイドと異なるのは、音声が、空間を人文・社会科学的に感じ読み解くための「視点」を提示するものであることだろう。この試みは、教育の現場で試練され、学生にあらたな人文学の愉みを提示することを目指している。

最後に挙げるのは、大阪大学文学研究科日本学研究室の日本学事始め演習として取組まれている「地域から発見したテーマ史」研究である[*4]。このプログラムは、フィールドでの問題発見をテーマとした演習プログラムであり、大阪大学の所在地である豊中市をフィールドとして「豊中で発見したテーマ史」をチーム毎に作成することが参加者の課題である。もちろん豊中を知ることが第一の目的であるのだが、それと同等にあるいはそれ以上に身近な地域を歩くなかで見つけた関心を「豊中」のなかで、「大阪」のなかで、さらには「日本」のなかで、位置づけていくことが目標である。学問の入り口に経つ学生たち

の視点の複数性が、地域と大学の関係をつなぐアクセスポイントになる可能性をさぐっていく。学問の境界が溶解していく時代のなかでの領域横断的な人文学入門プログラムとしてアップデートしていきたいと考えている。

インスタレーションやディスカッション・ペーパー、さらにはここで取り上げた三つのプロジェクトはそれぞれ個別の展開をみせはじめている。これらすべてに通底しているのは、「文字」としての言葉に根っこで支えられる「研究」という営みを、どのように自覚し、マルチモダルなインターフェイスを想定し、再び「文字」としての言葉の位相を再想像しうるのかという問いである。メディア論と研究方法論の議論がまじわる地点において、拘束性が“一端”解除された次に訪れるのは、新たな研究のための共通言語の構想であるだろう。今後も研究方法の提案／思考を続けるなかで人文学の方法論についての議論に取り組んでいきたいと考えている。

なお、COEとしてのプロジェクトは、2006年度で一旦終了となるが、これまでの活動で作り上げてきたネットワークを、今後も、有効に活用し発展させるため、イメ日班を母体に「大阪大学現代文化研究センター（仮称）」を新設し（2007年春予定）、多ジャンル間に広がる研究活動のネットワーク作りを継承したいと考えている。（真鍋昌賢・山中千恵）

［まなべまさよし・大阪大学大学院文学研究科助手］

［いとうゆう・京都国際マンガミュージアム／国際マンガ研究センター研究員］

［やまなかちえ・大阪大学大学院人間科学研究科社会環境学講座助手］

［注］

1――グループ発表「越境するポップカルチャー、奪用される〈日本〉」は以下の5人の発表で構成されている。表智之「輸出される「オタク」」、伊藤遊「輸出される〈日本〉――日本のポップカルチャー政策をめぐって」、山中千恵「中心化されるポップな〈日本〉――韓国における日本ポピュラーカルチャーの受容から見えるもの――」、Jessica Bauwens「Girls' popular culture going its own way: The diffusion of Japanese cute and Yaoi」、Renato Rivera「Mainstream Acceptance of Japanese Animation in the West... Or is it?」。モナシュ大での発表も予めDPが配布された。

2――このことは、当COE全体の課題でもあり、そのためのツールとして、イメ日プロジェクトの実験は先駆的であったのではないだろうか。そのことは、当COEの別プロジェクト「若手研究集合」における議論のシステム

として、DP方式が採用されたことからもわかる。また、「若手研究集合」にておいて「インターフェイスの人文学」を考えるために「越境」と「横断」というテーマが設定されたとき、イメ日のインスタレーション方式を引き継いだ形の「討議マップ」も開発された。これによって、それまですれ違いの多かった全く分野の違う若手研究集合のメンバーが、研究的にも心理的にも歩み寄るきっかけになったように思う。一方、若手研究集合での実験は、イメ日のそれがより開かれたイベントでの発表のために開発されたのに対し、研究者同士の討議におけるツールとして改良されていった。それゆえに、マップそのものの構造もそこで議論される内容も非常に高度で精緻なものに進化していった。

3——— 中野民夫『ワークショップ——新しい学びと創造の場』岩波書店、2001年

4——— 真鍋昌賢「「地域」からはじまる「日本」研究—日本学事始め演習の実践記録と今後の課題—」『日本学報』25、2006年

呉智英氏　講演録
「イメージとしての〈日本〉」研究プロジェクト主催　公開講演会
課題「ポピュラー・カルチャー研究の課題と可能性」

（編集担当　古川岳志）

講師紹介

呉智英（くれ　ともふさ）氏

1946年、愛知県生まれ。評論家。日本マンガ学会会長。

著書に『現代マンガの全体像』『封建主義者かく語りき』『危険な思想家』『大衆食堂の人々』（以上双葉社）『読書家の新技術』（朝日新聞社）『現代人の論語』（文藝春秋）『マンガ狂につける薬21』（メディアファクトリー）など多数。

＊　＊　＊

「イメージとしての〈日本〉研究プロジェクト」では、2006年度の主催事業として、評論家の呉智英氏（評論家・日本マンガ学会会長）の講演会を開催しました。（開催日・2006年7月8日、於・大阪大学豊中キャンパス）一般の方々を含め参加者は100名近くになりました。講演では、私たちのプロジェクトが主要な研究対象の一つとして取り上げてきた「ポピュラー・カルチャー」を考えることの意味について、長年、マンガ評論の第一人者として活躍されてきた立場からお話いただきました。

この報告書全体にかかわる問題提起も含まれた刺激的な内容でした。当日の録音をもとに、講演記録を掲載します（次頁以下）。

なお掲載した講演のあと、1時間ほど質疑応答の時間があり、意義深い内容の議論が展開されましたが、紙幅の関係上割愛いたします。また、当日はレジュメも配布されていますが、別掲せず、本文中にカッコでその記載内容を挿入しています。

講演録の掲載に関しては呉智英氏に許可を得ていますが、テキスト化は講演会企画スタッフで行いました。編集上の責任は、担当の古川岳志にあります。

こんにちは。呉でございます。こんなにたくさんの人に集まってくださるとはちょっと想像してませんでした。テーマが地味ですしね。土曜日のこんな時間ですので、まあ20～30人かなと思ってたんですが、大変多くの方にお集まりいただきまして、どうもありがとうございます。

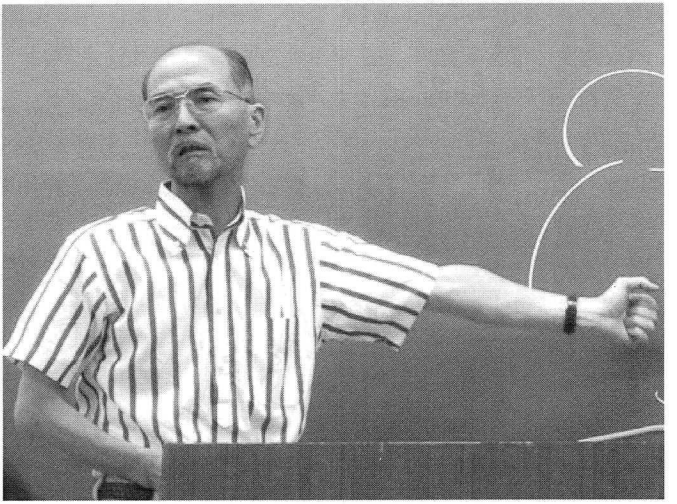
演題がこんな風（「ポピュラー・カルチャー研究の課題と可能性」）に書いてありまして、かなり学術的な、連続セミナーのようなことらしいですけれども、私は大学でも非常勤講師というかたちでいくつか教えていますが基本的には在野の人間で、自分が好きなことを書いたり喋ったりしてやっている人間です。ここにも何人かいらっしゃる大学の先生が書かれたものを、ちょこちょこっとつまみ食いして、加工して書くということをやっています。

これは後の話にも繋がってきますが、自分のやっている仕事ですから、我田引水風に言えば、皆さん方がどんどん小さく狭いところに突っ込んでいったのを、私が広く流通させている、という風に解釈できるわけです。専門家の大学人の方から見れば大変嫌がられる立場なんですね。非常にいい加減だ、という風に嫌がられます。ある大学の先生と話していてですね、偶然私がその大学にも非常勤講師で行ったことがあったんですけれど、ある学会の大家といわれる人にその時に会いましてね、名刺渡しまして、「あ、君も○○大学にいるのかね」と言うんで、「ええ実は今年から非常勤講師で」って言うと、「どういうことをやってるのかね？」「いやまあ文化論を……」って言ったら、「ええっ？　文化論？」と、こう露骨に嫌な顔をされましてね。「近頃はそういうことを大学でやる人がいて困る。あ、君のことを言ってるんじゃないんだよ」って明らかに私のことなんですが（笑）。非常に嫌がられるんですね。まあこれは、当然といえば当然でして、そういうことがあるんです。

ところが実は、私の方から見てもあまりにもひどいような大学の先生方、専門をやっていらっしゃる割には、これはいかにもひどいんじゃないかという方もいらっしゃいますんで、これはどちらもどっちじゃないかと思っています。そういう立場の私から見て、ポピュラーカルチャーについて大学なんかで研究するというのはどういう意味なのか、ということについてお話をいたします。

これは別にいちいちレジュメ書くほどのことじゃないんですが、まあこういう流れで話すということと、キーワードをいちいち黒板に板書していますと、私も字が汚いんで読みにくいとかですね、後ろの方の人ですと、漢字がごちゃごちゃっとなって読みにくいって

いうのがありまして、キーワードめいたものをプリントしてきたのがお手元に配ってあります。



1. ポピュラーカルチャー研究の〈究極の〉目的・動機

一番最初に、第1章（ポピュラーカルチャー研究の〈究極の〉目的・動機／実は知識人論）と書いてあります。これがまあ、実は一番言いたいことなんですね。ポピュラーカルチャー研究の究極の目的、動機とは何かというとですね、実はこれは知識人論ではないか、というのが私の考えです。そして例えば「知識人論」というようなことについては、現在の大学システムの中においては、講義のしようもないし教えようもない。これはひょっとしたら、大学という枠、制度と違うところで成立してるものじゃないか、という気がいたします。そういう意味では、これはむしろ私のような在野の評論家がやるべきことである。著作や言論でやるべきことかもしれません。もちろん、大学にいらっしゃる方々が知識人でないわけではなくて、文字通りズバリ、知識人。直球ど真ん中に当たるわけですから、これは一人一人考えていただかなければいけないんですけれども、知識人がどうあるか、どう生きるかというようなことは、大学において講義してもしょうがない。

だいたい知識人はどうあるべきかということについて、単位を認定する、なんてことができるわけないわけですね。というわけで、これはもう大きく大学という枠を外れた、人間としての課題といいますか、社会としての課題、あるいは歴史としての課題ということになるかと思います。で、実はポピュラーカルチャーを研究するということの裏にはこれがあり、実はこれが究極の目的であり、課題であり、あるいは動機であるのだ、こういう気がいたします。これは今日の私の話の最後まで繋がることでもあります。

それから実は、知識人とは何なのか、知識人とはどうあるべきかということは、私の、大げさに言いますと終生の課題でありまして、極端に言いますと子供の頃からずっと考えていたことなんですね。それは同時に、私の、あちらこちらで述べていますことと関係しております。世の中には知識人と愚民の二種類の人間しかいないんじゃないか。で、愚民に依拠して社会変革が果たしてできるだろうか。これは私が子供の頃から考えていました。私が子供の頃に、非常に優れた小学生知識人であったから、というわけではもちろんなくて、極めて素朴な疑問を持っていたんですね。クラスで多数決で何かを決める。これが果たして、あらゆるところに通用してしまっていいんだろうか、という疑問があったんですね。

どういうことかといいますと、泥棒の集団があって、そこがどこどこの家をこれから襲撃しようということを多数決で決めて、その家を襲撃して、ものをかっぱらってきたことは許されるかどうか。こういう問題ですね。別に私がさっき言ったように小学生知識人であったからではなくて、誰でも小学生の頃に、少し頭が鋭敏な子であれば、当然考えることですね。ところが我々がなぜか真理だと教えられている民主主義という概念の中では、これが正であるとも否であるとも判断できない。のみならず多くの場合は、これは正であると判断せざるを得ない、ということが必然的に現在の社会の中にあるわけですね。

私は、実は小学校の頃から考えていることを、今年秋に60になるんですけども、60に至るまで、ただ言っているだけの人間ということなんですね。これは冗談でも何でもなくて、そうなんです。ちょっと話を踏み外しますと、ついこの間私の高校時代の同窓会がありまして、普段出ないんですが、今言ったように、秋に私は60になります。同級生も60になるので、みんな還暦になる機会に同窓会をやる。おまえは普段同窓会なんて嫌がって出ないけれども、もう仲間はずれにしてしまうぞ、っていう回状を貰ってたんで、しょうがなくて、何十年かぶりに出ました。ところが、今から1ヶ月くらい前に、NHKのBSの番組で『名作平積み大作戦』というのがありまして、そこでハーマン・メルヴィルの『白

鯨〜モビーディック』を扱って、私がプレゼンターとして出演していました。同級生の中にそれを見ていた奴が何人かいまして、同窓会の会場に行きますと、にやにや笑って私の顔を見てるんですね。「おまえ45年経っても中学の時と同じこと言って、今、金稼いでるな」って言うんですね（笑）。私が中学の時にモビーディックを読んで、面白い面白いって言ってて、私につられて買わされた奴とか、そういうこと覚えてるんですね。「おまえ、同じことまだ言ってんじゃないか」って言うんですけど。まあ、私もその時ふと気づきまして、考えてみれば私は小学校、中学校の頃から、ただ単に同じことを言ってるんだという気がしております。それはさっき言いました、盗賊の集団があってそこで民主主義的に、どこどこの家を襲撃すると議決をして、そこを襲撃したことは許されるのか。それが許されないとする根拠があるならば、それは民主主義以外のどこから持ってくるのかという問題も、同じように子供の頃から考えていたことなんですけどね。

さて、これが知識人論ということなんですけれども、ポピュラーカルチャーと知識人ということなんですが、今言ったようにポピュラーカルチャーというのは基本的に、ポピュラー、民衆の方ですね、大衆の方が受容し、生産しているカルチャーということになります。一方の、それに対する言葉というのは、特にあるかどうかわかりませんけれども、とりあえずこれはハイカルチャーという風に言いますと、ハイカルチャーとポピュラーカルチャーという構造になりますね。知識人は基本的に、ハイカルチャーを身につけることによって、階層としての知識人の内の一員になっていく。そのためにポピュラーカルチャーのほうに目を向けるということは、これはもう、ダメになるためのパスポートをもらったようなものである。本来の安定した知識人社会は、そのような形になっているわけですね。ところが、時々それに対して反旗を翻す人が出てまいります。その一環であるかどうかわかりませんけれども、この大阪大学なんかにおいても、ポピュラーカルチャー研究がなされているわけですね。こういう動きがいくつかの大学で、しかも名門大学で出てくる。これは後で述べることにも関係してまいりますけれども、基本的にポピュラーカルチャーに関心を持っている大学は、これは名門大学です。DランクEランクの大学でポピュラーカルチャーの講義なんかありません。もうこの中に、すべて実は問題の答えが潜んでいるんですけどね。名門大学でポピュラーカルチャーの研究が行われる。ただし東京大学だけは、うちはそういうことはやらない、だからそれが東京大学であるという矜持のようなものを持っていますけれども、基本的に名門大学なんですね。

2. 過去の知識人の例

さて、大学のことはともかくといたしまして、大衆文化の方に関心を持った例を二人見ておくと、以下の話がわかりやすくなります。

一番最初は柳田国男という人物ですね。明治8年に生まれて、昭和37年に亡くなっています。日本民俗学の祖という人物です。現在の民俗学であるとか、さらにはその後継であるところの考現学なんかをやる時に、この人の本は読まなきゃいけない。専門の民俗学をやる時には柳田国男の著作を全部読んで、それをカードに取らなきゃいけないなんてことが、ひところはいわれておりました。こういう人物なんですね。それまでは民俗学というのは日本にはなかった。この人が民俗学を始めた時に、そんなものは好事家のすることに過ぎないんだというんで、みんなが奇異の念で柳田国男を見ておりました。というのは柳田国男はエリートだったからですね。東京帝大を出まして、そのあと衆議院の書記官長だか何かになっていますね。海外にも留学している、超エリートなわけですね。それが田舎に行ってその辺の方言を収集したり、その辺の習俗について聞いたりしてる。これは単に物好きがやることであって学問ではないという風に思われていた。方言ということであれば、現在、方言はずいぶんなくなってるんですけれども、皆さん方もどこかの地方に旅行いたしますと、その泊まった宿なんかの土産物売場なんかに、方言を書いた湯呑みとか、それから暖簾のようなものを売ってますね。この地方の方言でこれが一番珍しいとか、これを言えばその地方を代表するような方言というのはそういうとこに書いてある。で、それを集めて暖簾にしている。というのと柳田国男の研究というのは、そんなに違わないと昔は思われていたわけですね。だからそんなものやるのは、それこそ暖簾屋がやるようなものであって、学者がやることではないと思われていた。ところが、柳田国男は、これをやらなければこれからの日本の学問のひとつが成り立たないと考えていました。それはキーワードとして、例えば「常民」「新国学」。これはほんとに柳田国男が言ったかどうかについては、また学会において議論があるんですけれども、少なくとも現在は柳田国男と結びつけられてるキーワードになっているものなんですね。常民というのは常の民、つまり民衆ということですね。普通の民衆、という意味ですね。特に柳田国男の場合には、これを農民のようなものとして扱っていたので、これに対して批判が出てきまして、民衆というなら農民以外の、移動する民も常民と言っていいんじゃないかという議論もあります

けれども、そういう細かいことは置いておいて、常民、一般民衆というもの、これがどういう生活形態の中に生きてるかということを知らなければ、社会のことはわからない。同時にこれに、柳田国男は新国学と名づけた。これもほんとに柳田がどういう文脈で言ったか、ほんとにこの通りのことを言ったかどうかについて、専門家の間で議論がありますけれども、とりあえず、まあ柳田国男というと新国学。江戸期に国学というのが起きてまいりました。それまでは支那、朝鮮の学問を学ぶのが学問であったけれども、そうではないんだというんで、例えば本居宣長なんかが出てきて、日本人の生活、日本人の言葉、これを研究するのが国学であるという風に言われています。これと同じような意味において、明治において、新国学というのをつくらなければいけないというのが柳田国男の主張だったわけですね。新国学というのは、明治の新国家、新たにできた国民国家を考える上において、その重要な構成員である一般人について考えなければいけない。で、これも、上の方に立って、これをただ単に啓蒙領導するのではなくて、その人達が普段何を考え、どのような風に生活をしているのかを知るのが一つの学問領域になる。西洋では民俗学、フォークロアというのだけれども、これを日本に根付かせなければいけないというのが柳田国男がやった作業だったわけですね。

今では大変な知識人の典型のように言われてますけれども、当初はあくまでも物好きがやっている、暖簾に書かれている方言と違わないというように思われてる。これもやはり、ハイカルチャーのほうからポピュラーカルチャーを見るまなざし、あるいはハイカルチャーにいるエリートたちがポピュラーカルチャーを評価する時の一つの視点であったということになります。

それから、隣の支那の例を考えてみます。この場合にはもう少し歴史的なスパンが長くなります。そうであるが故に、私がチャプター1で言ったように、これはポピュラーカルチャー研究というものの究極の目的は知識人論であるということになるんですけれども。

支那文学の中に志怪小説というのがあります。志怪というのは怪を志すと書いてあるんですけれども、志すわけじゃなくて、ごんべんをつければわかるように、怪を誌（しる）すということですね。簡単に言えば怪談ということです。これを考える時にキーワードになるのは君子という言葉です。君子というのは、君主と意味が半分くらい重なるんで誤解されますけど、君主とは直接関係ありません。君主とはmonarchですね。これはmon-archですから一人の統治ですね。これが君主です。これとは別概念で、君子というのは何かと

いうと、君主たりうるような為政者、あるいは指導者、知識人、これの総称ですね。現在で言えば知識人層、知識階層。当然ながら、ここにいらっしゃってるような、ざっと見ると8割ぐらい学生のようですけれども、まあ、阪大もしくはその近くにあるようないくつかの名門大学を出て、将来、社会的な中心層になっていくような人たち、これを君子と名づけているわけですね。

その君子が身につけるべき教養というのは何かということなんですけれども、その身につけるべき教養というのは、基本的に歴史の史、それから詩集の詩、この2つの「し」を身につけなければいけない。基本図書、といいますか基本文献、基本教養文献の中には、「春秋」という歴史書があったり、「詩経」、文字通り詩ですね、これが身につけておかなければいけない教養である。

で、身につけてはいけない教養。つまり私のやってる専門であるマンガのように、ひところは、子供の頃マンガ読んでるとバカになるので、マンガ読んではいけない、学校の教科書を読まなければいけない、と言われた、そのマンガに当たるものですね。この原型が小説なんですね。小説は、まあ英語なんかではnovelというような言い方をする。あるいはromanとかreciとかいろんな言い方をしますけれども、アジアにおいては、日本でそうであるように小説、小さな説、立派ではない説ってことですね。で、上に稗史小説とか稗官小説とかいうのがつきます。稗というのは、これはヒエですね。ヒエ粒のようにもろもろ、小さくてたくさんある、ゴミのようなもの。これが小説ですね。小説というのはそのようなものに扱われていたわけですね。知識人はそんな小説なんか読んじゃいけない。

ということが、実は、戦後の知識人の間にまでかなり言われていました。東京帝大なんかの学生がですね、あいつは小説「なんか」読んでる、という風に言われた。これが現在では、さっき言いましたDランクEランクの大学行きますと、あいつは小説読んでるって尊敬されるような。その小説がまあ、赤川次郎とかその程度なんですけどね（笑）。そういう時代になってしまっている。これも実は、今日のテーマと関係していまして、社会の平準化、大衆化というのが、そういうところにも表れているわけですね。

ところが、かつての支那人の中にも、そういう状況に対して反感を抱いている、そういうエリート知識人がいる。その中にはいろんなタイプがあるんですけれども、一つは蒲松齢（1640～1715）という人物ですね。大変有名な『聊斎志異』という怪談集、支那にはいくつか怪談集があるんですが、その集大成のようなものですね。清朝の頃の作家なんですけれど。「志異」というのは、同じように、異を志すんじゃなくて、異を誌すわけですね。

奇妙な話をしるしたものというのが『聊斎志異』です。まあ日本人の怪談の感覚と微妙に違っているところがまた面白くて、ご関心のある方は翻訳がいくつも出ているので、読まれると大変面白いと思います。

蒲松齢が『聊斎志異』のようなものを、知識人としてやってはいけないような、マンガのようなものですね、民間の間に広まっている怪談を集めて、現在で言うならマンガ家になってそういう話を描いたようなことをなぜしたか。これも諸説あるんですが、通説では、この人は本来、もっと早く知識人として上級国家公務員試験である科挙の試験に通らなきゃいけなかったんだけれども、ある意味頭が良すぎるようなところがありまして、いろんなことに関心を持ちすぎて、そのために全然、国家試験が受からない。70歳になっても、70歳でやっと受かったのかな、74歳くらいまで生きてるんですけど、晩年の4年間くらい、やっと国家公務員試験を受けて、国家公務員として仕事をする。当時の支那人にとって、この科挙の試験を通って国家公務員になるというのは、単に名誉だけではなくて、大変な経済的な意味を持っているわけですね。ですからこれが受からないっていうのは大変に不名誉であり、食うにも困るような状況なんですけれども、70歳まで、30浪も40浪もしていたという、途方もない人物なんですね。当然その間、当時の支那人ですから、こういう生活ができるというのは豊かな階層ですからね、浪人のまま30浪も40浪してるうちに浪人のまま結婚して子供も産まれます。頭がいい人の子供ですから、子供の方は真面目に勉強して、お父さんより先に国家公務員試験に受かってる。息子が立派に大学行って就職してるのに、お父さんまだ浪人っていうのを70歳までやってたという途方もない人なんですけどね。

そういう屈折もありまして、知識人世界の学問体系、文化体系に対する反発もありまして、それが彼のエネルギーを、民間に伝わっている奇妙な話、不思議な話を集めて、文章化する、そういうエネルギーを発揮させるような方向になりました。逆に言えば、そんなことやってるから試験受からんのだろう、とこういうことも成り立つんですけれども。文字通りマンガばっかり読んでたんで試験受かんなかった。読んでたのみならず、自分もマンガまで描き出しちゃったから試験が受からなかった。こういう人物なんですけれどね。

で、彼は、そういう民間の間に伝わっている怪談の中にこそ、逆に人間の真実、社会の真実が表れているという考えを持っていたわけです。

もう一例を挙げますと、これは今の蒲松齢とは逆なんですが、時代が少し下りますけど、袁枚（1716～1797）という人物ですね。これは清朝の乾隆期の文人なんですけれど

も。さっき言いました国家試験のいくつかの段階があるんですが、進士という試験までは受かっておりまして、そしてそのあと、現在で言いますと、県知事とか市長とか町長とか助役と言いますかね、それくらいの地位にまでつきまして、辣腕ぶりも発揮する。なかなか有能な能吏ぶりを発揮する人なんですけど。この袁枚という人が、同時に文人としても優れた人物でありまして、詩人としても大変に名声がある。当時の三大詩人の一人と言われていたんですが、やはりちょっと変わったところがありまして、旧来の文化秩序に反発を感じるようなところがあって、女性に詩を教えて、一種の女流文学ということを提唱している。これが、女にそんなことを教えるのは不道徳である、秩序を乱すっていうんで、批判されるような人物だったんですね。この人がやはり怪談集『子不語』というのを書いております。この『子不語』というのはどういうのかというと、その上を遡ること6行くらいのところ（レジュメ）にこう書いてあります。「子は、怪・力・乱・神を語らず」この「怪・力・乱・神（かい・りょく・らん・しん）」を時々誤読して「かいりきらんしん」と誤読する人がいるんですけど、そういう説もなきにしもあらずなんですが、これは一応通説では「かい・りょく・らん・しん」、4つ区切ります。

「子は語らず　怪・力・乱・神」孔子先生は、怪や力や乱や神について語らなかった。怪っていうのは怪しいこと。力というのは、これはちょっとわかりにくいんですけど、まあ神話上のヘラクレスであるとか、スサノオノミコトであるような、ああいう力ですね。乱は乱れたこと。神は神秘的なこと。ですから、まあひっくるめて、怪しいこと、不可思議なこと。これについて孔子先生は語らなかったということが、論語述而篇に書かれています。それは必然的に民衆の間に伝わっているような、曖昧な神話であるとか伝説のようなものですね。知識人というものは、君子たるものは、やはり歴史書であるとか詩経を読まなきゃいけないんだということになるわけですね。

それにあえて異を唱えた袁枚はですね、自分の怪談集に『子不語』、子は語らず、というタイトルをつけたわけですね。つまり、子は語らず、しかし私は語る。何を語るかというと、怪・力・乱・神を語るんだ、というタイトルをつけたわけです。

この二人、二例だけを挙げておきましたけれども、ともに大変な大知識人でありながら、当時の知識人の文化秩序に対して批判の念を持っていた。蒲松齢に関しては、やや同情の余地はない、といいますか、そりゃおまえは試験に落ち続けただけじゃないか、とも言えなくはないんですけれども、袁枚の場合は意図的にこれに対して異を唱えていた気配があります。いずれにしても大知識人が自分が置かれていた知識人の文化秩序に対して反

感を抱いて、ポピュラーカルチャーのほうに目を向けた。つまりそれは、逆に自分のいる地位、位置、立ち位置、というものを照らし出す。知識人とは何なんだろう。体制化した知識人ではない知識人を自分が追求するとすればどうなるだろうという、こういうのが見られている。柳田国男の最初の出発点にしろ、さらに歴史的なスパンを長く考えました支那の二人の文人を考えても、ポピュラーカルチャーというものの置かれている位置、逆に言えばポピュラーカルチャーというのは知識人に発見されて初めてポピュラーカルチャーになるんだ、論じられて初めてポピュラーカルチャーになるんだ、というのが、ここに表れているような気がいたします。

3. 戦後の大衆文化〔P. C.〕特にマンガの語られ方

さて、次にですね、私がいささか専門的にやっていますマンガのほうに引きつけてお話を致します。日本マンガ学会というのが2001年にできまして、今年で6年目になります。つい先日、新潟で日本マンガ学会の第六回の大会、初めての地方大会ですけれども、これを行いました。最初にこのマンガ学会ができた時にも、マンガを研究する、学問として研究するなんてことがあるんだろうか、というような不審の念を抱かれました。学会というのは日本にいくつもあります。日本は研究の自由、集会の自由というのがありますから、どんな学会を作ろうと全く自由なんですね。学会と名がついてますけど冗談学会のようなものもたくさんありまして、私は直接は関与してませんけれども、友人なんかで入ってる「と学会」トンデモ本学会っていうのがあります。これはまあ確かにそうそうたる人物が集まってるんですけども、本来の意味での学会の体はなしていませんね。年に一回どっかに集まって、それで今年のトンデモ本大賞っていうのを選んでるってことをやってるわけですから、いわゆる文部省が認定してるかどうか知りませんけれども、そういう学会とはちょっと趣を異にしています。マンガ学会というのはどうもそういうものではないかと世間では多くの人が思ってるんですけれども、別にトンデモ学会を差別するわけじゃありませんけれど、マンガ学会はもうちょっときちっとした学会で、その内文部省あたりからでも助成金を取ろうかくらいのことは考えてるんですけれども、それでも世間一般では、なんか変な奴が集まって変なことをしてる学会だ、冗談学会だ、くらいにしか思われていません。しかし着々と研究は進んでおりまして、非常に有意義な研究も出ている。中には

ほとんど中学生、高校生の夏休みの感想文程度のことを発表してくるようなものもいないではない。まあそれがたまたま、その延長線上に大学院生になった、くらいの感じのがいまして、学会でそういう人が、私から言わせればほとんど高校生の感想文のようなことを発表するんで、批判なんかもするんですけれど、さすがにこの1～2年はそういう傾向もなくなりまして、やはり学問的に、学問的にというのは狭い意味でのアカデミズムということではありませんけれども、それなりに水準の高いものがなければだめだという雰囲気になってきています。マンガにご関心がある方は、ぜひともマンガ学会のほうにも加わっていただきたいんですけれども、ここは別にマンガ学会ではありませんので、この全体のテーマに添ったかたちで、ちょっとマンガの論じられ方について、戦後の大衆文化、特に、私の専門でやっているマンガの論じられ方について、極めて簡単に、まあ概観ともいえないくらい短く、少しお話をしておきますと、話が繋がってくるかと思います。

とりあえずここでは、3つくらいに時代を分けたんですが（①1960年代まで②1960年代末期から③1980年代末期から）、これはまあもっと細かくも分けられますし、いろいろ分け方があるんですが、今日の主題に沿ってわかりやすく、この程度に分けてみました。

1960年代まで。1945年に日本が敗戦いたしまして、それから20年間くらいですね。昭和20年から昭和40年くらいまでの間です。その頃までマンガというのがどういうところでどのように論じられたか。ジャーナリズムの場で、あるいは教育の現場で、いろんなところで論じられたんですけれども、だいたい二つのタイプの知識人がこのような論じ方（批判、仕方なく許容、善導、利用）をしていました。一つは、教育関係者。PTAがどうとか学校の先生がどうとか。あるいはごく普通の教養人。普通に漱石鴎外で育ってきた教養人が、たまたま子供がマンガを読んでいるんで、これについてちょっと新聞に投書しなきゃいかん、というような、こういう水準の教養人、知識人。それから、もう少し意図的ですけれども、今の日本の文化を、このままではいけないという風に思っている共産党系の文化人。いけなくてどっちの方向に向かっていくかというのは、別にそれは賛否いろいろあっていいんですが、共産党の思ってるようなかたちでの文化のあり方の方に持っていかなきゃならない、と思ってる知識人。この辺は実は、結構基盤が共通のようなところがありまして、この人たちがマンガをどう考えているかというと基本的に批判ですね。このように低俗で、下品な、愚民化政策を推進するようなもの。とはいうものの、子供たちがこんなに読んでいる事実は否定できない。それを頭ごなしに取り上げたり、本を破いたりすることもできないだろう。じゃあどうしようかというと、これを善導し利用する方向

でいかなきゃいけない。こういうのが大体この人たちの考えなんですね。子供が読んでいるのはしょうがない、読んでいたら、それに対して批判精神を植え付ける。このマンガについてどう思うか、こうこうこうだ。子供たちは、まあ時にはそれに対して批判的なことを言いますね。うん、なかなかいいところに目をつけた。その批判をさらに徹底していくとどうなるかよく考えてみよう、それについて他の本も読んでみよう、というような風に善導していくわけですね。あるいは、こんなに子供たちが喜び、あるいは子供以外にも、青少年の中でぼつぼつマンガを読む風潮が出てくるわけですけれども、だとしたらそれを啓蒙するために、労働者の前衛である共産党の方を向いてもらうために、あるいは共産党の文化政策を理解してもらうためには、マンガを利用したらいいではないか、ということですね。これがまあ善導・利用というかたちでのマンガのディレクションということですね。こういうのが一方でありました。これが基本的には多数派です。

もう一つは、①のb)(思想の科学グループ〔鶴見俊輔ほか〕、新日文〔非日共系左翼文学者たち〕)と書きました、別の知識人のグループの捉え方があります。これは一つには思想の科学グループ、鶴見俊輔さんという方が京都在住の知識人ですけれども、思想の科学に属する何人かの知識人、この人たちが、マンガとかポピュラーカルチャー、大衆文化、民衆文化ということについて資料を集めて研究をしておりました。それからそれと重なり合うかたちであるのが、新日文系の知識人。これは簡単に言えば、『新日本文学』という機関誌を出していて、昭和20年、日本の敗戦によって新たな文化を作らなきゃいけないために結集した文学者たちですね。ついこの間これは廃刊になりましたけれども、50年あまり出ていました。これは当初は共産党を中心とする文学者たちと一緒にやっておりましたけれども、共産党による政治主義的な引き回しに反発いたしまして、共産党系の人たちだけが追い出されたのか、自分から出ていったのか知りませんけれども、民主文学というのを作りまして出てしまいます。だから残りの人ですね。ですから非常に簡単にいえば、非共産党系の左翼系文化人が集まっているのが新日文と考えれば、まああまり間違いではありません。こういう人たちが、やはりしばしばマンガとか大衆文化というのに関心を持っていまして、基本的に、この新日文系の作家とか評論家と、それから思想の科学グループの人たちが、まあ人脈的にも近いというのがありまして、いろんなところでマンガを論じていました。で、この人たちは上のタイプの教育関係者やあるいは共産党系の文化人と違って、単純に批判はいたしません。問題点はあるかもしれない。しかしそこに何か汲むべきもの、評価すべきものもあるのである。ただ単に残虐であるとかエロであると

か、殺伐としているというかたちで、これを批判してしまってはいけない。むしろ、その残虐であるとかエロチシズムであるというところに民衆のエネルギーを見たほうがいいではないかという、そういう視点があります。

これは私は次に「基本構図」(民衆の文化を発見→歴史〔革命？〕の原動力) という風に書いておいたんですけれども、民衆の文化を発見することによって、それを歴史の原動力と考えていこう。これについてa) に当たるタイプの人たちは、これをもっと洗練させて善導していかなきゃいけないと考えていたわけですけれども、b) の人たちは、そのあるがままのエネルギーをもっと高く評価していいんではないかという風に考えていた。いずれにしても基本構図としては、民衆の文化を発見する。民衆は歴史の主人公である。社会の主人公である。で、それを上手に我々は発見して、歴史の進歩の方向にディレクションしていこうという考えがここに見られるように思われます。

ところが、1960年代の後半くらいになりますと、様相が変わってまいります。これは一つには、そこの②のb) (マンガ世代〔1946＝S21生まれ以降〕が学生読者となる。高度成長期・大衆社会化の中でのマンガの読み手、語り手。) と書いておいたように、マンガ世代の若者たちが学生になります。これもちょっとそのうちマンガ学会で誰かが研究してくれないかと思うんですけれども、非常に不思議なことに、私がそのマンガ世代の一番最初の年なんです。私は1946年、昭和21年に生まれていますけれども、私の世代からマンガを当たり前のように大学生になって読むようになりまして、私より1年上になりますと、突然これが読まないという不思議なことがあります。もちろん例外はあると思いますけれども。私が大学時代にマンガを読んでいますと、私より1年上の先輩たちは、おまえ大学生になってマンガを読んでいるのか、という風に言われたことが頻繁にあります。そして私より上の世代はほとんどマンガを読みません。ところが私と同世代、同年代と、私より後の世代はみんな当たり前のようにマンガを読みます。これがなぜ昭和21年が境目になるのか、私はちょっとよくわからない。しかもそのデータの取り方も、私の体験的なものだけですから、本格的な社会調査をしたら、また別の数字が出るかもわかりません。とにかく体験的には私がマンガ世代の一番頭に当たってます。

こういう世代が1960年代後半になりますと、大学生、逆に言えば、一番口うるさい世代ということになりますね。これがマンガを読むようになって、いろんな出版社に投書をしたり、あるいは『読書新聞』とか『読書人』のようなところに未熟な論文を書いたり、私自身も覚えがありますけれども、そういうことをするような時代になってきた。それ

もありまして、1960年代までのような、単純な民衆の文化を発見して、それを社会の原動力として評価していこうというような発想だけではマンガを読まなくなってまいりました。それをいわばオーソライズしたのが、そこに②a）と書いておきました、石子順造（1929＝S4～1977＝S52）という評論家なんですね。『漫画主義』という、マンガ研究の同人誌です。これ1967年に創刊されまして、不定期刊のまま、十数巻出たまま他の雑誌に併合吸収されてそのまま出ないままになっています。単独で刊行されたのが10冊くらい。1971～1972年くらいまであるんですけれども。ここの同人の中心になっていたのが石子順造という人です。他にもこの同人だった人で評論活動している人がいて、この人たちはこの人たちでちょっと問題があるんですけれども、そんなことはあまり細かく言っても仕方がないんで、とにかく石子順造という人が中心になっていた『漫画主義』という雑誌ですね。

ここでもう一つまた注記しておかなければいけない、石子順という漫画評論家がいるんですけど、全然関係ない人です。で、この石子順造、亡くなったほうの石子順造という人がですね、悪戦苦闘したのが、彼は①のb）に近いところから出発しながら、やはり違うものをポピュラーカルチャーとしてのマンガの中に見ようとしていた。それは何かというと、マンガ固有の論理があるんじゃないか。ただ単に民衆の文化を発見して、それを歴史の原動力、社会の主人公として評価していくというのではないというのを、彼は考えようとしたわけですね。例えば、マンガのコマからコマへの移動、視線の移動がどんな意味を持ってるだろう、というようなことについて、事細かく研究していました。これが現在の、夏目房之介とか竹熊健太郎という人たちのマンガ研究に繋がる一面も持っています。そのために、夏目さんなんかは、石子順造は現在もうちょっと再評価されてもいいんじゃないか、というようなことも、何度も言っています。とにかく石子順造は、まわりがほとんど（①の）a）もしくはb）の知識人の間で、いやもっと違う視点があるという風に言っていたことについては、私は高く評価していかなければいけないと思っています。同時に、そういうものを読みながら、あるいはそういう風潮を横目で見ながら、21～22歳の学生たちがマンガを読んで、大学のキャンパスの片隅で、侃々諤々の青臭い議論を展開していたわけですね。

例えばこんなことがあるんですね。今言ったように、仮に①の論理でいきますと、説明ができないことが、当然ながらいくらでも出てまいります。自分たちが面白いと思ったマンガ、例えば『巨人の星』が大変面白い。梶原一騎の代表作ですね。これが当時、左翼的

な学生運動をやってる学生たちもまわし読みをしていた。これは面白い。ところが、ここに描かれているのは、梶原一騎に典型的に表れてる家父長的な、現在ではしばしばこの家父長が、からかい、パロディの対象にしかならないような、長屋に住んで、ご飯を食べていて気に入らないと卓袱台をひっくり返すような、こういう家父長的なお父さんですね。実は、その『巨人の星』の中にそういうシーンは一箇所も描かれていないんだということを、また細かく研究した人もいるんですけれども。あれは伝説であって、そういうシーンはないんだ、とかですね。いや、アニメにはあったとか、いろいろ説があるんですけれども、まあいずれにしても、そういう話が出てもおかしくないような、家父長的な、あえて言えば、俗語で言うところの封建的な父親像が描かれている。それにみんな、面白い面白いと言って感動しているとするならば、上の①に挙げた、民衆文化を発見してこれを歴史の原動力の方向に行くという進歩的左翼史観では、これは評価しきれない。それが面白いとするならば、その面白さは何なのかということについて考えない限り、答えは出てこないんじゃないかというのがでてまいります。つまり、知識人論、勝手に自分の枠組みで大衆文化を語ったとしても、そこからはみ出るものが出てきてしまった場合にはどうするのか、というのがこの時出てくるんですね。

で、その内に今度、時代が変わってきまして、その世代が今度は社会的に編集者になったりジャーナリストになったり、研究者になる世代になってきます。これが③（1980年代末期から／現代思想、ポストモダン思考の〔一知半解・恣意的〕導入）ですね。これが1980年代の終わりぐらいです。この頃から初めて従来の①や②にとらわれない形での、マンガ論、マンガ評論、マンガ研究というのが出てまいります。

いささか我田引水めきますけれども、私が1986年に『現代マンガの全体像』という本を書きまして、これが当時としては画期的な売れ行きを見せまして、元版が2万部売れました。そのあと増補版が6千、文庫がそのあと2万数千。累計で現在も文庫は細々と出ていますんで、5万部くらい出ました。現在でもですけれども、マンガの評論、研究で4万、5万出るってことは異例のことなんですね。ましてやその頃に親本で2万部出るというのは画期的なことだったんですけれども。幸いにもこれは評価が高くて、もちろん現在では批判、異論も出ていて、それは当然のことだと思うんですが、それも含めて、マンガを研究する人たちの中では一種、基本文献的に読まれるようになっております。ところが、これが出たときにはすべての新聞その他の書評欄は無視いたしました。読売新聞だけが批判的な書評を載せる。批判したのは無署名ですけど、私はうすうすわかってるんで（笑）いつ

か筆誅を加えてやろうかと思っています（笑）。

そういう状況だったんですね。それぐらいマンガ評論なんていうものは、それ以前はなかった。ところが私がそれを書いた翌年ぐらいからは次々に、というのは、私が今言いました、昭和21年生まれですので、その先頭にいるわけですけれども、その2年後、3年後、次々に研究者、評論家のような人も、従来にはない形でマンガ評論を書くようになりまして、1980年代末期というのは、現在マンガについて発言している人たちのほとんどの処女作、あるいは第二作ぐらいまでその時に出揃うような時代になりました。この時のマンガの評論の特徴といたしまして、私や何人かは違っておりますけれど、多くの人のは、当時ちょうど流行りかけていたポストモダンとか現代思想の用語をふんだんにちりばめた視点でマンガの評論を行うようになりました。

そこ（レジュメ）に書いてありますけれども、それはほとんどが一知半解、もしくは恣意的な導入であったという風に私は考えております。

少し話は外れますけれども、思想とか哲学というものにも、実は流行がありまして、終戦直後からある時期は、当然ながらマルクス主義が20～30年流行いたします。その後、戦前のようなマルクス主義ではなくて、新しい形での、マルクスの原点にあたるエンゲルスの原点にあたるようなのが流行いたします。そしてそれと並行して、実存主義というのも流行いたします。ともにこれは大抵、ヨーロッパ経由ですね。マルクス主義なんかの場合はフランクフルト学派なんかの新しい解釈が流れ込み、あるいはルカーチなんかの、ハンガリーとかそちらの方の系統のものが流れ込む。そして西洋的なものの場合はフランスで流行したものが流れ込む。まあ、こういうようなことになってるんですけれども。若い者はすぐそれに飛びつきます。そして20～30年経ちますと、その本は古本屋に持っていっても、もう二束三文でも取ってくれない。学生時代に3千円で買ったのが古本屋で30円で取ってくれないんだったら、あの時焼肉食っときゃ良かったなあと、まあ大人になってから悔やむわけですね。こんな本読んでも何の役にも立たなかった。

というように、流行も、着るものだけではなくて、そういう思想のほうにも流行ります。着るものでもそうですね。なんか流行だから喜んで高いの買いますと、2～3年経つと着られなくなっちゃう。これくらいだったらもうちょっと、普通のポロシャツでも買っておいて、その差額の分で、やはり焼肉でも食えばよかった（笑）となるんですが、同じようなものが、衣類であろうと思想であろうと流行るということが大変面白いんですけれどもね。

ところが、現在はマルクス主義のような射程距離の長い思想がありませんために、このポストモダン的な用語をちりばめた一知半解のものが未だに結構幅を利かせているようなところがあるんですけれど、同時にそれはそれで、一種の解釈のためのタームだと考えれば、それはそれで意味はあるんですけれども、そのあとに「基本構図」(現在的な意味での「民衆の文化の発見→歴史(革命?)の原動力」を主張しているだけではないのか。)と書いておきましたように、実はやはり形を変えて現在的な意味での民衆文化の発見、そしてそれは最終的には歴史、あるいは革命の原動力ということを主張したいだけではないか、という気がいたします。というのは、そういう、マンガについて発言している人のそのすぐ横にある、その人たちのスタンスといいますか、別の立場で、別の場所で発言している言葉を聞いていますと、割とごく当たり前の革新派のようなことを言っている人が結構多いんですね。現在の日本のアジア政策がどうしたとか、それから天皇制がどうしたとか、民衆の市民意識がどうしたとか、セックスについての保守的な観念がどうした、ってなことを結構言ってまして、それは普通の、なんか進歩的文化人が言ってることじゃないかという気もいたします。私は進歩思想がいけないとかいいとかってことを単純に言ってるわけではありません。進歩思想のいい面もありますし、進歩思想のだめな面もありますけれども、それが表層的な流行だけで語られてしまっているのではだめだ。それぐらいだったら、もっとはっきり根性を据えて、極めて反動的な思想でありながら、政治的には反動的な思想家でありながら、革新的な、例えば白土三平であるとか、『はだしのゲン』を評価するような、そういうもっとタフな理論を作っていただきたいと思いますけれども、実はそうなっていません。というのは、この場合にも当然ながら、先ほどのとこと同じように、疑問点が出てまいります。

これはプリントのp2の方に(疑問点:『レイプマン』〔みやわきしんたろう〕をどう見るか。マンガではないが、レイシズム的なロック音楽をどう見るか。)書いてあるんですが、みやわきしんたろうという人の『レイプマン』という作品が出まして、これがまあ大変な悪評の作品なんですね。恐らくこの中にいらっしゃる方は、これ読んだことがあるのは数人しかいらっしゃらないと思うんですけれども、文字通りレイプマン、強姦男っていうタイトルなんですけれどもね。レイプマンという謎の正義の味方がいるんですけれども、生意気な女の上司とか、女の同僚に、あるいは同級生に、いつも虐められて悔しい思いをしている青年が、謎の正義の味方レイプマンに頼むと、そういう上司、同級生を強姦してくれる。で、強姦されるとその女が突然優しい女になるという勧善懲悪の物語なんです

けれども（笑）構造的にはこれ、勧善懲悪の構造を持ってるわけですね。ところが勧善懲悪じゃない。現在の理念に照らせば勧善懲悪じゃない。しかもこれが、結構何十万部売れた。これどう考えたらいいのか。これをポストモダンで解釈しようが何で解釈しようが、どう考えても今私が言ったように、勧善懲悪じゃないことが勧善懲悪の形になり、しかもそれを何十万の人が喜んで読んでいる。こういう現実があるわけですね。これは何なのかということを考えなければ、単純にさっきの①もしくは③で言ったような、形を変えた民衆の文化を発見し、これが歴史や社会の主人公、原動力という風に考えることは当然できなくなるわけですね。当然これに対しては、その知識人の側、論者の側の思想の強さ、思想のタフネス、これが問われることになる。そこのところを、実はこの第3章（戦後の大衆文化〔P.C.〕特にマンガの語られ方）で書いた知識人たちの中の意識が希薄であった。これは実は戦後、あるいはもっと遡って近代における、あるいは国民国家における知識人というものが、大衆という言葉を出されると、そこでついびびってしまうような弱さがあったんじゃないかというような気がします。もっと知識人は自信をもっていい。知識人は自信を持って愚民は愚民だとはっきり言っていい。ただし、愚民の中に汲むべきものもある。そして知識人の中に自己反省すべき点もある。

それは例えば、チャプター2で述べました、支那の知識人たちがそうなわけですね。確かに蒲松齢なんかは、たかだかおまえは大学落ちて、公務員試験に落ちてるのを70までやっていた、その妬みで民衆の中の伝承を集めたに過ぎない、と言われるかもわからないけれども、それでもやはり、彼が知識人世界の秩序を学ぶことに嫌悪感を覚えたのは、何かあったのである。嫌悪感があったから、彼は受験勉強ができなくて、民衆の中に入っていったわけである。あるいは袁枚が当時の知識人世界の中においてエリートでありながらも、最後には非難されるような行動を取り、そしてまた、知識人世界の中核にあるところの、儒教の原点である論語に対して、挑発的にも『子不語』というタイトルで怪奇小説を書いてしまったような、こういう知識人としての、知識人とそれから大衆、両方に向けての非常に厳しい視点と自信がここに感じられます。ところがおそらくは戦後の大衆社会において、そういうものはなくなってきた。そのために、例えば『レイプマン』をどう評価していいか。『レイプマン』を批判するなら批判していい。批判する視点が、じゃあ『レイプマン』というものを、これを抹殺してしまっていい、とまで言えるのか。言い切るんならそれでいいんですよ。現在の出版の自由だの言論の自由なんてやめてしまって、こんなけしからんものは抹殺してしまえ、と言えるんならいいけど、そこまで言うだけの度胸も

なく、何となくうじうじと、こういうマンガがあるのは困ったもんだなあ、という風にしか言えないというのは、それは知識人の力のなさ、その強靱さのなさ。強度を試されている、という気がいたします。

4. ポピュラーカルチャー研究の意義

さて、そうなりますと、第4章としてですね、ポピュラーカルチャー研究の意味ということになってきまして、これは今の3と当然、関係してきますね。その現代の文化というものをどう考えたらいいのか。ここにおいて大衆文化、それからハイカルチャー、この両方との関係の中において、これをどう考えるのかという問題が出てきます。

さっきもちょっと言いましたように、現在の大学の再編成が進んでるんですけれども、文学部で、まあ赤川次郎なんかを専攻するっていうことは、あまり考えられません。私が大学生であったのは今から30数年ぐらい前なんですけれども、その頃文学部において、例えば太宰治さえも、まず研究テーマに選ばれなかった。ところが今は太宰治なんかは当たり前のように選ばれるようになっています。基本的に大学の文学部でやるのは、戦前。鴎外とか漱石とか露伴とか。できればそれさえも嫌がる教授がいるんで、明治以前の、江戸期以前の作家を研究する。これが文学部のやり方だった。ところが、現在の文化ということで言うならば、江戸期の西鶴であるとか、あるいは近松であるというのも、これは当然ながら当時においてはポピュラーカルチャーなわけですね。鶴屋南北という人、『東海道四谷怪談』で有名な、大傑作を書いている、非常に優れた人物なんですけれども、この『東海道四谷怪談』というのは当たり前ですけれども、知識人だけが見るものじゃない。どころか、知識人はむしろあんなもの見ませんね。一般大衆があれを見て恐がったり面白がったりする、そういうものを書いたのが鶴屋南北だった。西鶴の場合はまあ、ちょっと性格が違いますけれども、近松なんかの場合もやはり一般大衆ですね。浄瑠璃としてこれを見て楽しんでいたわけですね。それを現在、ハイカルチャーの秩序世界の中にいる学者が研究するということはどういうことなんだろうか。だとしたら、現在ポピュラーカルチャーを読んでる人の意識、あるいはポピュラーカルチャーそのものをハイカルチャーの中にいる知識人も研究していいんではないか。ただしそれは、そのポピュラーカルチャーをそのまま受動的に読んでる人とは当然、どっかにおいてディメンジョンの違う意識を持ってな

きゃいけない、と、こういうことになってまいります。ここのところ課題だけで、じゃあ何をどうすればいいかってことについては、特に今、私はここでは述べません。

そして②（研究と評論）として、それを見る視点としても、研究と評論という2つのものが、当然出てくるんですね。特に大学でやる場合には、これは実証研究ですね。まあ、評論と研究がどう違い、どう重なるかというのは非常に難しいところがあります。異同、異と同、両方あって、これも特にマンガ学会なんかではこれから重大な課題になってまいります。これが万葉集なんかの研究ってことになりますとね、評論と研究ってことがほとんどなくて、まず99%が研究になります。一部、評論というものがないわけでもない。例えば、加藤周一という文藝評論家がいまして、大変、日本では社会的地位が高い人物ですね。大佛次郎賞とかいろんな賞を受賞しているんですけれども、しかし、日本の国文学の学会においてはこの人は全く評価されていない。なぜかというと、あんなものは評論だ、という一言で切り捨てられる。つまり実証研究として非常に弱いわけですね。まあ、古典文学の世界においてもそういうことはありますけれども、ましてや現代に近い方の文化、さらにポピュラーカルチャーを研究するほうになりますと、この評論と研究の微妙な両方の位置の取り方というものが露呈してくるんではないかという風な気がいたします。

しかし、いずれにしてもこの二つは何らかの形で、車の両輪のように手を携えていかなければいけないことではないかと思います。実証研究は否応なく細かいところを、ドリルで穴を開けるように突っ込んで行かざるを得ない。マンガでいえば小さなひとコマの意味、これがテキストによってどう違うか。例えば『少年マガジン』の何月号にはこう出ていたけれども、総集編ではこのように描き直されて、次に単行本ではこう描き直されて、作品集ではこう描き直される、と。これを突っ込んでいくと実は、この作家の精神がこうなるのがわかる、なんてことを、こと細かく研究するのが、これが実証研究になるわけですね。評論家の方から言わせますと「そんなこと細かくやって何が面白いの？」と、こういうことになるわけですけれども、その実証があってこそ、評論が評論たり得る。というのは、評論の場合には、もっと社会に対する発信性が非常に強くなってきますね。有効性が強い。

私は評論と研究の違いを、まあ漁師と板前っていう風に昔からよくなぞらえて言ってるんですけれどもね。漁師はやはり地道に、ニシンならニシン、シャケならシャケを真面目に獲ってもらわなければ、これは漁師にならないわけですね。しかも、獲ってきたサメの頭と尻尾を切り落として、これはマグロだなんて言ったんじゃあ、これは漁師として失格

ですね。しかし評論家は、サメをマグロと言うのはちょっとまずいですけれど、ほんとはヒラメではないんですが、「白身魚のフライ」って書きますと、お客さんはみんなヒラメだと誤解しますからね。それぐらいのことは、まあ、やってもいいんじゃないか、というのが評論家ではないかと思います。はっきりこれをヒラメだって言うと、評論家としてもちょっとまずいですが、「白身魚のフライ」までだったら許容範囲。これがまあ、評論家ではないかと思います。

で、また、そのようなことをしなければ魚文化というものはお客さんに広まりません。魚を美味しく加工することによって、魚を愛する人が増えるという社会的使命を持っておりますから、評論家はその程度のことはやってもいいわけですね。この両者が車の両輪のごとく、手を携えて研究していくのが一番いいのではないかと思います。これについてはそのような一般論しか言うことがありません。いずれ、これだけ単独で研究テーマとしてどっかで扱わなければいけない、という風に思っております。

5. 実学と虚学

そうしますと最後に言わなければいけないのが、チャプター1でも述べました、知識人論ということですね。さっきから言っているように、知識人は自らハイカルチャーの中にいながら、ポピュラーカルチャーを見る。その時に、そのポピュラーカルチャーを利用している一般大衆に対しても、そしてまた自らに対しても、もっと自信を持って、厳しい姿勢で対処していいのではないか。その姿勢がないのではないか、というのが、ここ50年間ぐらいの大衆社会状況における私の知識人批判であり、知識人論なんですけれども。

さて、知識人というのはその場合どういう人なのかということなんですけれども、大学院を出て大学の先生になって給料もらっておればこれが知識人か、っていうと、こういうことには必ずしもなりませんね。じゃあ、大学院の試験を落ちて大学の先生にならなければ知識人か、っていうと、こんなこともないわけですね。で、本質規定としてどうなのかといいますと、結局は言葉を操る人が知識人である。言葉っていうのは、観念の具体物なわけですから、まあ言葉を操り観念を操る人だ。これが知識人ですね。そのことによって、言葉を操らない人に対する責任も生じるわけですね。ここで実は、実学と虚学ということについてちょっと考えてみたいんですね。

現在、実学っていうのは、実用学。まあこの阪大でいいますと例えば工学部と医学部。で、文学部とか社会学というのは、これはまあ虚学とまでは言いませんけれども、実学ではない。で、成績のいい高校生たちは、やや今不況から立ち直りつつありますけれども、親なんかが、実学の方向に行った方がいい。「お前、そんな社会学行くぐらいだったら、工学部行け」とかですね、「もう1年浪人すれば医学部も夢じゃないぞ」みたいなことを勧めるわけですね。そういう傾向があって、実学志向とか実学という言葉が言われていますけれども、本来この実学、虚学というのは、このような意味での実用学っていうんじゃないんですね。これはもともと朝鮮朱子学で言われてる言葉なんですけれども、実学というのは実のある学問ということで、この場合は我田引水で言ってますから、儒教こそが実学である、ってことになるわけですね。それがほんとかどうかは、私は多大に疑問がありますけれども、実のある学問である。つまり現実に拮抗しうる学問である。これは基本的に知識人の心構えということになりますね。その意味で知識人というのを考えた場合に、自らは、観念を操る、言葉を操る。言葉っていうのは、しばしばこれは虚の世界なんだけれども、しかし、時には現実に拮抗しうるだけの言葉や観念を持つこともある。これが知識人である。という風に私は考えています。

それはひとつには、ここのところマルクス主義が凋落いたしまして、1989年から91年にかけて、社会主義の崩壊というよりも、社会主義国の崩壊によって、ついでに社会主義もマルクス主義も全部、一網打尽のような形で崩壊してしまったんですけれども、そのことによって失ったことも結構ある。これについて語り出せば大変長くなるので語らないんですが、一言だけ言いますと、例えば現在でも北朝鮮の問題とか、更には在日朝鮮人の問題とか、必ず民族の問題というのが、特に近代に入ってからは大きな問題なわけです。国民国家ができる前は、またこれはこれで民族問題はあったんですけれども、現在のような形では問題になっていませんでした。ところが、国民国家ができると同時に、民族問題が大変大きな問題になってきた。ヨーロッパにおいては、国民国家ができる前からユダヤ人問題が大変大きな問題になっていたわけですね。つまり民族の壁をどう越えるかというのは、人類にとってかなり大きなテーマだったわけです。その時に、マルクス主義者においては、そういう国籍出自にとらわれないものとしてのプロレタリアートという、一種の操作概念を作りまして、すべてがプロレタリアートであることを自覚し、それが団結すれば、そのことによって歴史が進歩し、かつ卑小な民族性も克服できるんだ、というのを提起した。いわば、普遍人、一般人としてのプロレタリアートという概念を提起したんです

けれども、実はそんなものはどこにもないっていうのが、理論的にも実証的にもそれが否定されてしまった。そうなりますと、最後には、一体我々はどのようにして、個別の自分、個別の民族、個別の国というのを越えることができるのかということを模索しなければいけないんですけれども、なかなかそのような大仕事は、誰もいたしません。

ところが歴史を考えてみますと、実は観念、言葉をもてあそぶ人間というものが、それに一番近いのでは、という気がいたしております。それが、ひとつにはカール・マンハイムという、社会学の橋本先生に言わせれば、あの人は二流だという風に言ってるんですが、二流なりになかなか魅力的な、ユダヤ系のカール・マンハイムという社会学者がいます。私はこの人の本を読んだのはもう、30～40年ぐらい前ですかね。大変面白いと思うことがいくつかあったんですけれども、知識人は浮遊する存在である。このことによって普遍性を獲得できるんだ、というような趣旨のことを言っております。これは私、なかなか面白いことだなと思いました。そして同時に、知識人というのは、例えば大衆と、つまりマスカルチャーと、それからハイカルチャーの間の両方の視線移動ができる存在。これが知識人である。いかなる意味においても知識人は、観念、言葉を操ることによって、自由に浮遊する能力を持っているわけですから、今度はそれが現実と拮抗しうるようなものになる。これがやはり知識人の大きな使命であり生き方ではないかという気がいたします。

同時に、支那思想で始めましたので、支那思想で結びますと、儒教の方では「格物致知」という言い方をいたします。これは大学の中の八条目というのがありまして、格物致知、誠心誠意、修身斉家、治国平天下という風に、知識人がやるべき役割は八つ、同心円状に広がります。その根本にあるのが格物致知なんですけれども。この格物致知が読み方が朱子学の方と陽明学の方で、少し違っています。どちらも興味深いんですけどね。朱子学の方では「物に致りて知を格む（きわむ）」まあ、この最後の「格む」の読み方が、「物に致りて知に格る（いたる）」という読み方もあるんですが、私は「きわむ」と読んだ方がわかりやすいと思うんでこう読みます。物に致りて知を格む。ものごとに致り尽くして、ものごとに到達して、そしてその本質を知ることによって、知を格めることができる。これが朱子学の見方です。

王陽明の方は、これを「物を致して（ただして）知を格す（いたす）」と読みます。もののあり方をただして、そのことによって知をいたす、知を実践する。これが知識人の生き方だ、という言い方ですね。微妙な違いがあって、この違いは違いで面白いんですが、私

のような素人としては、ともに面白いとしか言いようがありません。

同時にこの対極にあるのが、これはまあ、朱子が近思録で言っていますけれど、他の人も、黄宗羲なんかも言ってますが、「玩物喪志」。これは必ずしもこれに対比してでてきた言葉ではないんですけれども、私の中ではこれはどうも対比的ではないかという気がして仕方がありません。これは簡単ですね。「物を玩んで志を喪う」ということですね。つまりまあ、あえて言えばオタクってことですね。オタクもコレクター、コレクション自体は別に悪いことじゃないんで、コレクションがなければ研究も何もできないんですけれども。ただ単に、オタク的に物を玩んで、たくさん集めたとしても、これは知識人の営為とはいえない。

ここのところが、オタクと知識人の違いである。極端に言えば、知識人の場合には、マンガにしろ、あるいはポピュラー音楽にしろ、3つか4つだけしか知らなくても、そのことによって知的世界を再構築できるというのが知識人である。トリビアなものをたくさん集めたとしても、それは統一性を持っている。これに対してポストモダンの方では、そういう構築性、統一性がいけないんだ、ってなことを言うんですけれども、私はこれには与いたしません。じゃあ、そんな、何の構築も、何の統一もないものが社会として成り立ちうるのか、ということですね。

先ほど、現実と拮抗しうる知識人ということを言ったんですけれども、ついこの間、まあ結果的にはテポドンが発射されてしまったんですけれども、発射される前に、むしろ発射されたほうがいいんではないかと、特に防衛庁の官僚なんかは思ってたんじゃないかと思うんですね。このことによって自分たちの今までの主張が認められるってことになるんですからね。同時に、テポドンによって現実的に被害が出てないんで、逆に私も防衛庁の味方するわけじゃありませんが、よかったと思っております。これによって少なくとも、北朝鮮に対して、あくまでも、日本も太陽政策を取るのか、それはそれで一つの考えなんですよ。あくまでも太陽政策を取るというんなら、それはそれでいいんです。それでちゃんとやっていく気なら。あるいは断固たる措置を取るのか。私はこちらのほうを支持しますけれども、それはそれでいいということをはっきり考えなきゃいけなくなったという意味において、テポドンは意味があったと思いますけど。

同じように、また不穏なことを言うようですけれども、オウムのサリン事件とか、あるいは阪神大震災とか、これに匹敵するような大災害が日本に起きてもいいんじゃないか、と。起きた時に、その時に思想を問われるんですね。その時にも、なおかつ物語だ、少女

だ、消費だ、っておまえ言ってられるかオオツカ！（笑）っていう風に私は思うんですけれどね。

それはつまり、知識人としての強度、思想の強度ということを私は言いたい。地震が起きようがテポドンが飛んでこようが、おまえはその主張を言えるのか。結局これに尽きるわけですね。現実と拮抗できるような言葉っていうのはそういうことだと思うんです。それを自信を持って言えるかどうかという、日々の営みが知識人を知識人たらしめているような気がします。

とりあえず1時間ほど喋ったんで、これでいったん終わります。どうもありがとう。

（了）

「イメージとしての〈日本〉」活動彙報

2003-2004

若手研究者「イメージとしての〈日本〉」ワークショップ

・日時：9月27日（土）・9月28日（日）

・於：大阪大学大学院文学研究科（豊中キャンパス）

9月27日（土）

○セッションA：グローバリズムの中の消費される〈日本〉

—10:00～13:00／14:00～17:00

・コーディネーター：冨山一郎（大阪大学）、成実弘至（京都造形芸術大学）、ジャクリーヌ・ベルント（横浜国立大学）、山中浩司（大阪大学）、吉村和真（京都精華大学）

莊中孝之（大阪大学文学研究科　比較文学）

「遥かなる故郷の山に響く音 —Kazuo Ishiguroと川端康成」

太田健二（大阪大学人間科学研究科　コミュニケーション社会学）

「日本の音楽的イメージ —ジャパニメーションとテクノ（ロジー）ミュージック」

畑智章（大阪大学人間科学研究科　コミュニケーション社会学）

「オタク・アニメ・村上隆 —「スーパーフラット」をめぐって」

川畑薫・渡部留美（神戸大学総合人間科学研究科）

「浴衣にみる日本的イメージ：女子日本人大学生と女子アジア人留学生との比較調査からの一考察」

屋葺素子（大阪大学人間科学研究科　コミュニケーション社会学）

「北京における日本のポピュラー音楽」

山中千恵（大阪大学人間科学研究科　コミュニケーション社会学）

「韓国における「マンファ」と「まんが」をめぐるアンビバレンス」

○セッションB：ポピュラーカルチャーにおけるジェンダー
—10:00～13:00／14:00～17:00
・コーディネーター：荻野美穂（大阪大学）・川村邦光（大阪大学）・牟田和恵（大阪大学）

朴銀姫（大阪大学文学研究科　比較文学）
「ジェンダー化される文体—倉橋由美子の桂子さんシリーズ論—」
Jessica Bauwens（大阪大学人間科学研究科　コミュニケーション社会学）
「欧米のヤオイの人気」
崔殷景（大阪大学文学研究科　比較文学）
「思想としての身体 —三島由紀夫の戯曲を手掛かりとして」
吉澤弥生（大阪大学人間科学研究科　コミュニケーション社会学）
「『るきさん』と『ハルチン』 —消費社会と日常」
水野麗（名古屋大学人間情報研究科）
「〈ゴシック・ロリータ〉コミュニティにおけるセルフ・アイデンティティ」

9月28日（日）
○セッションC：〈日本〉自画像のメディア・ポリティクス
—10:00～13:00／14:00～16:30
・コーディネーター：阿部潔（関西学院大学）・冨山一郎（大阪大学）

寺内伸介（大阪大学文学研究科　比較文学）
「サブカルチャーと「日本」—谷崎潤一郎の映画論を中心に」
大橋庸子（大阪市立大学人間行動学専攻）
「観光インバウンド政策が描く日本イメージの変遷—観光資源の歴史的蓄積について」
有田亘（大阪大学人間科学研究科　コミュニケーション社会学）
「イメージとしての名作アニメ」
表智之（大阪大学文学研究科　日本学）
「〈おたく〉という自意識・〈日本〉という自画像」

前田雅司（大阪大学人間科学研究科　コミュニケーション社会学）
「日本のサブ・カルチャーを取り巻く物語性」

○セッションD：生活文化と身体感覚
—10:00～13:00
・コーディネーター：荻野美穂（大阪大学）、川村邦光（大阪大学）

魏仙芳（大阪大学文学研究科　日本学）
「現代日本における喫茶をめぐる一考察—茶飲料を中心として—」
西村久美子（大阪大学人間科学研究科　コミュニケーション社会学）
「スポーツ文化の越境と日本の生涯スポーツ」
伊藤遊（大阪大学文学研究科　日本学）
「考現学の経験」

○セッションE：モダニズムとナショナリズム
—10:00～13:00
・コーディネーター：中村生雄（大阪大学）、杉原達（大阪大学）

池田淑子（大阪大学言語文化研究科）
「他者の表象と日本人の自己イメージ—プロパガンダ映画『あの旗を撃て』と『桃太郎・海の神兵』」
黒田佑輝（大阪大学人間科学研究科　コミュニケーション社会学）
「1920年代を中心としたグラフ雑誌における皇族イメージの特徴」
三好琢（神戸大学総合人間科学研究科）
「山口誓子の戦前と戦後天狼の根源俳句」

○セッションF：メディア・産業・文化
—14:00～17:00
・コーディネーター：石田佐恵子（大阪市立大学）、岡田朋之（関西大学）
ピヤ・ポンサピタティックサンティ（大阪大学人間科学研究科　コミュニケーション社

会学）

「広告戦略文化的差—日本とタイのテレビ広告の比較」

国枝有実子（大阪大学人間科学研究科　臨床教育学）

「経済活動と結びついた〈感動〉に支配される日本」

米田幸弘（大阪大学人間科学研究科　コミュニケーション社会学）

「音楽産業におけるフレキシビリティ、イノベーション、トランスカルチャー」

○セッションG：文化と（ポスト）コロニアルアジア

—14:00～17:00

・コーディネーター：崎山政毅（立命館大学）、水嶋一憲（大阪産業大学）

柳沼典子（大阪大学文学研究科　日本学）

「中国オルタナティヴ（同時代）文学に表象される「日本」イメージ」

金華榮（大阪大学文学研究科　比較文学）

「近代と女性—羅蕙錫と平塚らいてうとの比較を中心に」

花森重行（大阪大学文学研究科　日本学）

「戦後のアジア認識と植民地・外地体験の変容—梅棹忠夫と堀田善衛をめぐって—」

研究ワークショップ

第1回（兼2003年度第1回日本学方法論の会）

「それぞれのマンガ体験、それぞれの語りの位置—マンガの語り方・国際比較研究—」

・日時：2003年5月26日（月）　13:00～17:00

・於：グランキューブ大阪（大阪国際会議場）

・コーディネーター：ジャクリーヌ・ベルント（ドイツ／横浜国立大学助教授）

・パネラー：ロジャー・サビン（イギリス／マンガ作家・セントマーチン・アート・デザイン・カレッジ講師）、イェンス・バルツァー（ドイツ／ジャーナリスト）、マルク・ベルナベ（スペイン［カタルーニャ］／翻訳家）、ジュリアン・バスティード（フランス／ジャーナリスト・コミック評論家）、吉村和真（京都精華大学研究員　マンガ学会理事）、伊藤遊（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程　COEプロジェクトRA）

・司会：表智之（大阪大学大学院文学研究科　COEプロジェクト研究員）

第2回

「占領地における日本軍のイメージ形成とプロパガンダ」

・日時：2003年7月6日（日）　14:00～17:00

・於：待兼山会館会議室（大阪大学豊中キャンパス）

・講師：倉沢愛子（慶應義塾大学教授）

・コメンテーター：川越道子（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程）、山中千恵（大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程　COEプロジェクトRA）、真鍋昌賢（大阪大学大学院文学研究科助手）

・司会：杉原達（大阪大学大学院文学研究科教授）

第3回

「創造性の管理と文化の政治学」

・日時：2003年10月29日（水）　15:00～18:00

・於：待兼山会館会議室（大阪大学豊中キャンパス）

・講師：山田奨治（国際日本文化研究センター助教授）

・コメンテーター：伊藤遊（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程　COEプロジェクトRA）、米田幸弘（大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程）

・司会：真鍋昌賢（大阪大学大学院文学研究科助手）

研究部会

第1研究部会：日本イメージ研究会

第1回　1月17日（金）

・報告者：表智之（文学研究科日本学　COEプロジェクト研究員）

・テキスト：上野俊哉「ジャパノイド・オートマトン」、毛利嘉孝「ジャパニメーションとジャパナイゼーション」『ユリイカ』28-9（青土社1996）

第2回　1月30日（木）

・報告者：伊藤遊（文学研究科日本学　COEプロジェクトRA）

・テキスト：岩渕功一『トランスナショナル・ジャパン』（岩波書店2001）

第3回　2月28日（木）

・テキスト：姜尚中・吉見俊哉『グローバル化の遠近法—新しい公共空間を求めて』（岩波書店2001）

第4回　3月13日（木）

・報告者：小浜雅史（人間科学研究科社会学理論　研究生）

・テキスト：大久保喬樹『見いだされた「日本」』（平凡社2001）

第5回　4月3日（木）

・報告者：伊藤遊（文学研究科日本学　院生　COEプロジェクトRA）、表智之（文学研究科日本学　COEプロジェクト研究員）

・テキスト：ポール・ドゥ・ゲイ他『実践カルチュラルスタディーズ』（大修館書店2000）

第6回　4月23日（水）

・報告者：畑中小百合（文学研究科日本学　院生）

・テキスト：ポール・ドゥ・ゲイ他『実践カルチュラルスタディーズ』（大修館書店2000）

第7回　5月12日（月）

・報告者：太田健二（人間科学研究科コミュニケーション社会学　院生）

・テキスト：フレデリック・ショット『ニッポンマンガ論』（マール社1996）

第8回　5月13日（火）

・報告者：柳沼典子（文学研究科日本学　院生）

・テキスト：「特集　中国幻想綺譚」『ユリイカ』35-1（青土社2003）

第2研究部会：ポピュラリティーの歴史・社会学研究会

第1回　3月14日（金）

・報告者：真鍋昌賢（文学研究科日本学　助手）

・テキスト：佐藤健二「社会学における歴史性の構築」『歴史社会学の作法—戦後社会科学批判』（岩波書店2001）

第2回　4月28日（月）

・報告者：山口優子（文学部日本学　学部生）

・テキスト：佐藤健二「作品としての『明治大正史世相篇』」同上書所収

第3回　5月21日（水）

・報告者：畑中小百合（文学研究科日本学　院生）

・テキスト　藤井隆至「柳田民俗学の政治経済学—現代民俗学への要望」（『国立歴史民族博物館研究報告』第27集1990）他

第4回　6月4日（水）

・報告者：澤田正太郎（文学研究科日本学　院生）

・テキスト：佐藤健二「民俗学と郷土の思想」（『岩波講座近代日本の文化史』第5巻　岩波書店2002）他

第5回　6月25日（水）

・報告者：黒田佑輝（人間科学研究科コミュニケーション社会学　院生）

・テキスト：色川大吉『昭和史世相篇』（小学館ライブラリー1994）

第6回　7月9日（水）

・報告者：橋本真佐子（文学部日本学　学部生）

・テキスト：佐藤健二「もうひとつの『明治事物起原』」『歴史社会学の作法—戦後社会科学批判（岩波書店2001）

第3研究部会：ワークショップ対策集中研究会

第1回　4月15日（火）

・報告者：山中千恵（人間科学研究科コミュニケーション社会学　院生　COEプロジェクトRA）

・テキスト：ジャクリーヌ・ベルント『マンガの国ニッポン—ニッポンの大衆文化・視覚文化の可能性』（花伝社1994）

第2回　5月6日（火）

・報告者：陳家彦（文学研究科日本学　院生）

・通訳：魏仙芳（文学研究科日本学　院生）

第3回　5月20日（火）「日本マンガの海外消費事情」

・報告者：伊藤靖子（文学部日本学　学部生）、藤本裕子（文学部日本学　研究生）、吉田雄介（文学部日本学　学部生）

・テキスト：夏目房之介『マンガ 世界 戦略　カモネギ化するかマンガ産業』（小学館2001）他

第4回　6月17日（火）「マンガ研究ワークショップ・成果検討会」

・報告者：伊藤遊（文学研究科日本学　院生　COEプロジェクトRA）、表智之（文学研究科日本学　院生　COEプロジェクト研究員）

第5回　6月24日（火）

・報告者：真鍋昌賢（文学研究科日本学　助手）

・テキスト：倉沢愛子「宣撫工作」『日本占領下のジャワ農村の変容』（草思社1992）

・報告者：川越道子（文学研究科日本学　院生）

・テキスト：倉沢愛子「日本占領下のインドネシア」『岩波講座東南アジア史8　国民国家形成の時代』（岩波書店2002）

第6回　7月1日（火）

・報告者：花森重行（文学研究科日本学　院生）

・テキスト：倉沢愛子「オランダ支配から日本軍政の開始まで」『日本占領下のジャワ農村の変容』（草思社1992）

・報告者：柳沼典子（文学研究科日本学　院生）

・テキスト：倉沢愛子「学校教育の充実」同書所収

第7回　10月7日（火）

・報告者：水津拓海（文学部日本学　学部生）

・テキスト：「日本文化と再創主義のすすめ」『日本文化の模倣と創造』(角川書店2002)

第8回　10月21日（火）

・報告者：表智之（文学研究科日本学　COE研究員）

・テキスト：山田奨治「著作権は何を守っているのか—著作権制度の光と影」『日本文化の模倣と創造』(角川書店2002)

・報告者：伊藤遊（文学研究科日本学　院生　COEプロジェクトRA）

・テキスト：山田奨治「複製の位相」『季刊d/SIGN』4（太田出版2003）

第9回　10月24日（金）「コメンテータープレ発表会」

・報告者：伊藤遊（文学研究科日本学　院生　COEプロジェクトRA）、米田幸弘（人間科学研究科コミュニケーション社会学　院生）

・参考文献：山田奨治『模倣と創造のダイナミズム』(勉誠出版2003)

21世紀COE関連授業

コミュニケーション社会学演習1・2「グローバリゼーションの中のポピュラーカルチャー」(博士前期・後期課程)、日本学研究方法論演習「日本研究の現状と問題点」「日本研究の可能性」(博士前期課程)、日本学研究方法論特殊演習「日本研究の展開」(博士後期課程)

2003年度日本学方法論の会

第1回　2003年5月26日（月）（担当：冨山一郎・真鍋昌賢）

「それぞれのマンガ体験、それぞれの語りの位置 —マンガの語り方・国際比較研究—」(詳細前述)

第2回　2003年9月20日（土）（担当：中村生雄）

「〈古代〉の表象」

・報告者：品田悦一（聖心女子大学）「民族の声・文学のあけぼの」、三浦佑之（千葉大学）「『古事記』と巌谷小波」、大山誠一（中部大学）「『日本書紀』と聖徳太子」

・コメント：中村生雄、花森重行（文学研究科日本学　院生）

第3回　2003年12月20日（土）（担当：川村邦光）

「「引き揚げ」をめぐる言説と力学」

・報告者：成田龍一（日本女子大学）「「引き揚げ」をめぐる言説と力学」

・コメント：川村邦光、伊藤遊（文学研究科日本学　院生）、植野真澄（文学研究科日本学院生）

運営会議

・第1回　2003年2月23日（日）　於　京大会館

・第2回　2003年4月23日（水）　於　大阪大学大学院文学研究科日本学B教室

・第3回　2003年6月11日（水）　於　大阪大学大学院文学研究科日本学B教室

・第4回　2003年8月26日（火）　於　大阪大学大学院文学研究科日本学B教室

・第5回　2004年2月28日（土）　於　京大会館

2004-2005

国際シンポジウム

Imaging Japan: A Symposium

※Japanese Studies Centre, Monash Universityなどとの共催

日時：3月4日（金）・5日（土）

於：Japanese Studies Centre（Monash University［オーストラリア］）

3月4日（金）

○Session 1　"Background for Understanding Popular Culture in Japan"

—10:00～11:00

Chair: Alison Tokita (Monash University)

Ito Kimio (Osaka University)

Sexuality and Violence in Japanese Popular Culture: Focusing on Boy's Culture

Manabe Masayoshi (Osaka University)

The Decline of Rokyoku: '1960s' as a significant point in the history of popular culture in Japan

○Session 2　"Manga Performance Workshop by Sato Maki: Performance and Articulation of Manga: the Grammar of Manga"

—11:30～13:00

Commentary: Kinsui Satoshi and Yoshimura Kazuma

Kinsui Satoshi (Osaka Universaity)

Language in contemporary Japanese Manga

Yoshimura Kazuma (Kyoto Seika University)

The Body in contemporary Japanese Manga

Sato Maki(Manga artist／Kyoto Seika University)

Manga Performance

○Session 3　"The Global Construction and Consumption of Japan"

—14:00～15:30

Chair: Audrey Yue (University of Melbourne)

Craig Norris(Monash University)

The Imagined Worlds of Australia's Manga fans

Joshua Sarcewicz (East Stroudsburg University [USA])

The Otaku Sub culture in America

Lerissa Hjorth (RMIT University and University of Melbourne)

Mobile Phones and Diversity in the Spread of Japanese 'Cute Culture' in the Asia-Pacific

○Session 4　Responses to manga culture in Australia: translation and dojinshi: Manga translation workshop and Dojinshi workshop

—16:00～17:30

James Rampart (Monash University)

An Introduction to the Workshop Concept

Kenny Chan (Monash University)

Manga in Singapore & Family Ninja Magic

Queeny Chan

Adopting Manga: From Hong Kong to America

Plenary Feedback Session on the Translation Workshop Format: An Invitation for Constructive Suggestions

Chair: Alison Tokita

3月5日（土）

○Session5　"Workshop / Installation: <Japan> as Image"

—9:30～11:00

Omote Tomoyuki (Osaka University)

Exporting (or exported) Otaku

Ito Yu (Osaka University)

Exported Japan –On Japan's cultural policy

Yamanaka Chie (Osaka University)

Centralized <Pop-Japan>

Jessica Bauwens (Osaka University)

Girl's popular culture going its own way; The diffusion of Japanese cute and Yaoi

Renato Rivera (Osaka University)

Japanese anime becoming mainstream – or is it ?

Installation: Omote Tomoyuki, Ito Yu, Yamanaka Chie, Jessica Bauwens, Renato Rivera and Nishida Yuko (Osaka University), Shimizu Ryosuke(Osaka University), Kubota Mio (Osaka University)

Parallel Sessions 6 & 7

—11:00～13:00

○Session 6　Manga Culture, Japanese Art and Cinema

Chair: Eiichi Tosaki(Monash University)

Eiichi Tosaki

Imagining Gi-wafu: Gi-yofu Kenchiku, Manga and Japanese Contemporary Art

Rio Otomo (University of Melbourne)

The Hong Kong Connection: Wong Kar-Wai's 2046 and Japanese as the Language of Desire

Katy Stevens (La Trobe University)

Technaural Violence in Chakushin ari

○Sessions 7　New directions in cross-cultural research on popular culture

Chair: Alison Tokita (Monash University)

Alison Tokita

Fuyu no sonata: Jaoan's new image of Korea

Ross Mouer and Craig Norris (Monash University)

Knowing Japan Through Image and Reality: A Reading of Peter Carey's Wrong about Japan

Peter Eckersall (University of Melbourne)

The Impact of Cultural Policy on the Avant Garde: The End of Angura System?

○Session 8　"Alternative Imaginings in Japanese popular culture"

—14:00～15:30

Chair: Jon Hogg

Mark McLelland (University of Queensland)

A Short History of 'Hentai'

Dean Chan (Edith Cowan University)

Imaging 'Asia' in Japanese Videogames

Kirsty Boyle（Artist／independent scholar）

Robot culture

○Session 9　Roundtable Discussion: “Issues for Future Research”

—16:00～17:15

Chair: Yoshimura Kazuma, Ito Kimio, Kinsui Satoshi, Alison Tokita, Craig Norris, Ross Mouer

若手研究者交流「イメージとしての〈日本〉ワークショップ」

・日時：9月25日（土）、26日（日）

・於：大阪大学中之島センター

9月25日（土）

○セッションA　グローバリズムの中の消費される〈日本〉

—12:00～14:30

・司会：伊藤公雄

・コメンテーター：冨山一郎（大阪大学）、山中千恵（大阪大学）、伊藤遊（大阪大学）

Craig Norris（Monash大学）

「マンガ体験とエスニックアイデンティティ—アジア系オーストラリア人の事例から」

大橋庸子（大阪市立大学）

「〈観光日本〉イメージの生産—観光政策審議会における語りから」

李婉寧（大阪大学）

「合理化の世界的潮流—コンビニの日中比較を事例として」

○セッションB　差異と差別のマンガ学

—15:00～16:00

・司会：冨山一郎（大阪大学）

・コメンテーター：伊藤公雄（大阪大学）、杉原達（大阪大学）

吉村和真（京都精華大学）、田中聡（立命館大学）、表智之（大阪大学）

「差別と向き合うマンガたち」

表智之（大阪大学）

「差別論の新たな場としてのマンガ」

9月26日（日）

○セッションC　ジェンダー、セクシュアリティ、ポピュラーカルチャー

—10:00～12:00

・司会：牟田和恵（大阪大学）

・コメンテーター：川村邦光（大阪大学）、東園子（大阪大学）、堀江有里（大阪大学）

Mark McLelland（Queensland 大学）

「変態的貿易：やおい美学の国際化—比較文化的観点からの考察」

Jessica Bauwens（大阪大学）

「性差別に抵抗する意外な社会運動：やおいとスラッシュ」

○セッションD　文化研究の困難

—14:00～16:30

・司会：冨山一郎

・コメンテーター：石田佐恵子（大阪市立大学）、山中浩司（大阪大学）

北出真紀江（大阪大学／ラジオパーソナリティ）

「メディア研究とメディア現場の狭間で」

古川岳志（大阪大学）

「イメージとしての現代文化研究」

研究ワークショップ

第4回「資料としてのポピュラーカルチャー」

・日時：7月30日（金）

・於：待兼山会館会議場

・講師：金水敏

・コメンテーター：東園子（大阪大学）、池田淑子（大阪大学）

・司会：表智之

第5回「メディア文化の国境の超え方」

※当COE「トランスナショナリティ」プロジェクト「トランスナショナリティ研究セミナー」との共催

・日時：12月3日（金）

・於：ユメンヌホール

・講師：岩渕功一

・コメンテーター：屋葺素子（大阪大学）、椿原敦子（大阪大学）

・司会：加藤敦典（大阪大学）

研究部会

第1研究部会・日本イメージ研究会

第1回　4月27日（火）

・報告者：吉田雄介（大阪大学）

・テキスト：清谷信一『Le OTAKU—フランスおたく事情』（KKベストセラーズ、1998）他

第2回研究部会：ワークショップ対策集中研究会

第1回　6月29日（火）

・報告者：伊藤遊（大阪大学）、表智之（大阪大学）、山中千恵（大阪大学）、Jessica Bawens（大阪大学）

・テキスト：金水敏『ヴァーチャル日本語　役割語の謎』（岩波書店、2003）

第2回　7月6日（火）

・報告者：東園子（大阪大学）、池田淑子（大阪大学）

第3回　7月27日（火）

・報告者：東園子（大阪大学）、池田淑子（大阪大学）

第4回　11月1日（月）

・報告者：椿原敦子（大阪大学）、来田淳（大阪大学）

・テキスト：岩渕功一『トランスナショナル・ジャパン』（岩波書店、2001）

第5回　11月9日（火）

・報告者：松川恭子（大阪大学）、魏仙芳（大阪大学）

・テキスト：岩渕功一『トランスナショナル・ジャパン』（岩波書店、2001）

第6回　11月16日（火）

・報告者：屋葺素子（大阪大学）、椿原敦子（大阪大学）

・テキスト：岩渕功一編著『グローバル・プリズム』（平凡社、2005）

第7回　11月30日（火）

・報告者：屋葺素子（大阪大学）、椿原敦子（大阪大学）

2005-2006

若手研究者「イメージとしての〈日本〉」ワークショップ

・日時：2005年6月25日（土）・26日（日）

・於：大阪大学中之島センター

6月25日（土）

○セッションA　ジェンダー、セクシュアリティ、ポピュラーカルチャー

—12：00～13：30

・司会：牟田和恵（大阪大学）

・コメンテーター：マット・ソーン（京都精華大学）、川村邦光（大阪大学）

菅沼勝彦（The University of Melbourne）

「バイナリズムの狭間で：消化されゆく「日本同性愛文化」表象への一考察」

坂井はまな（大阪大学）

「海外BDSM界における〈日本〉イメージについて」

○セッションB　ポピュラーカルチャーと〈日本〉イメージ

—14：00～15：30

・司会：金水敏（大阪大学）

・コメンテーター：石田佐恵子（大阪市立大学）、吉村和真（京都精華大学）、表智之（京都精華大学）

依田恵美（大阪大学）
「外国人らしさを担う役割語」
Renato Rivera Rusca（京都大学）
「Mainstream Acceptance of Japanese Animation in the West... Or is it?」

6月26日（日）
○セッションC　〈プレゼンテーション〉のデザイン
—10：00～12：00
・司会：伊藤公雄（京都大学）
・コメンテーター：石田佐恵子（大阪市大学）、岡田朋之（関西大学）、山中浩司（大阪大学）

西田優子（大阪大学COEメディアラボ）、久保田美生（大阪大学COEメディアラボ）、清水良介（大阪大学CSCD）
「3m×3m＝9m²＋——参加型ドローイングの報告」
表智之（京都精華大学）、伊藤遊（大阪大学）、山中千恵（大阪大学）、Jessica Bauwens（大阪大学）、Renato Rivera Rusca（京都大学）
「越境するポップカルチャー、奪用される〈日本〉」

○セッションD　イメージとしての〈日本〉をめぐるポリティクス
—13：00～15：30
・司会：冨山一郎（大阪大学）
・コメンテーター：阿部潔（関西学院大学）、マット・ソーン（京都精華大）

福間良明（香川大学）
「「反戦」に映る自己像—「きけわだつみのこえ」の読みの変容と戦後のナショナリティ—」

梁仁實（京都大学）

「「他者」表象の可能性と限界—『日本人的1少女』を読む」

Alwyn Spies（The University of British Columbia）

「イメージとしての〈日本〉と家父長制の投射」

一瀬陽子（大阪大学）

「〈ニホン〉——津田左右吉が想像した共同体」

○セッションE　総括：ポップカルチャー研究とこれからの大学

—16：00～17：00

・座談会：伊藤公雄（京都大学）、吉村和真（京都精華大学）、金水敏（大阪大学）、川村邦光（大阪大学）

・司会：表智之（京都精華大学）

2006-2007

7月8日（土）

「イメージとしての〈日本〉」研究プロジェクト主催公開講演会

・テーマ：「ポピュラーカルチャー研究の課題と可能性」

・講師：呉智英（評論家、日本マンガ学会会長）

・司会：古川岳志（大阪大学ほか非常勤講師）

・於：大阪大学文学部41教室

・時間：15:00～17:00

9月9日（土）

「イメージとしての〈日本〉」研究プロジェクト主催研究者交流ワークショップ

・テーマ：ポピュラー・カルチャー研究のゆくえ～「イメージとしての〈日本〉」の研究プジェクトから見えてきた課題をふまえて

・於：大阪大学文学部第一会議室（文学研究科本館2階）

・時間：13:00～17:00（第1部13:00～14:30　第2部15:00～16:30）

第1部　〈カルチャー〉再考〜運動としての文化／研究

・パネリスト：吉澤弥生（NPO recip　地域文化に関する情報とプロジェクト）、櫻田和也（NPO remo　記録と表現とメディアのための組織）

・司会：古川岳志（当プロジェクト・スタッフ）

第2部　ポピュラー・カルチャー研究の展望

・パネリスト：南田勝也（神戸山手大・ポピュラー音楽学会）、粟谷佳司（同志社大院・ポピュラー音楽学会）、吉村和真（京都精華大・日本マンガ学会）、伊藤公雄（京都大）、冨山一郎（大阪大）、金水敏（大阪大）

・司会：古川岳志（当プロジェクト・スタッフ）

10月15日（日）

国際シンポジウム「インターフェイスの人文学」第4セッション「イメージとしての〈日本〉」ポピュラーカルチャー研究の地平を越えて

・於：大阪大学中ノ島センター

第1部　映像で振り返る「イメージとしての〈日本〉」班の活動

・担当：山中千恵（大阪大学人間科学研究科助手）、伊藤遊（京都国際マンガミュージアム研究員）

第2部　「世界に広がる〈日本〉イメージ」

・担当：表智之（京都精華大学研究員）

第3部　ミニワークショップ「イメージとしての〈日本〉のこれから」

・担当：伊藤公雄（京都大学文学研究科教授）、金水敏（大阪大学文学研究科教授）、冨山一郎（大阪大学文学研究科教授）、吉村和真（京都精華大学マンガ学部助教授）、ジェシカ・バウエンス（京都精華大学講師）

「イメージとしての〈日本〉」報告書総目次

2002-2007

2002-2003年度報告書「イメージとしての〈日本〉」
日本文学——翻訳の可能性

目次

007 はじめに ｜伊井春樹

009 21世紀COE「インターフェイスの人文学」日本文学国際研究集会「日本文学の魅力／翻訳の可能性」概要報告

013 シンポジウム日本文学の魅力—留学生にとっての日本文学研究

014 パネラー・司会紹介

015 シンポジウム日本文学の魅力—留学生にとっての日本文学研究— ｜海野圭介

019 古典文学が今日持つ意味 ｜タケシ・ワタナベ

023 台湾における日本文学研究の現状について ｜廖秀娟

029 タイにおける日本文学—その回路— ｜マッタナー・チャトゥラセンパイロート

033 古典文学と翻訳 ｜テレサ・マルティネス・フェルナンデス

038 カジュアル・ソーセージ、コーンぬき ｜ジャック・ストーンマン

043 柳宗悦の挑戦芸術論—韓国人による評価の概観— ｜金容菊

049 シンポジウム日本文学翻訳の可能性

050 パネラー・司会紹介

051 シンポジウム日本文学翻訳の可能性 ｜伊井春樹

053 翻訳の危機翻訳の価値 ｜エドワード・ケイメンズ

058 The Dangers of Translation and the Value of Translation ｜ Edward Kamens

065 和歌の現代語訳と翻訳—伊勢物語を中心に— ｜ジョシュア・モストゥ

074 Japanese Classical Poetry, With Special Reference to Tales of Ise ｜ Joshua Scotto Mostow

082 与謝野晶子の『新訳源氏物語』—その翻訳の意義を中心に— ｜ゲイ・ローリー

090 誠実さ、それとも正確さ？ 遠藤周作文学を訳してみて ｜マーク・ウィリアムズ

101 Fidelity, or Accuracy? On Translating Endo's literature ｜ Mark Williams

115 補足・質疑・応答

134 日本古典文学翻訳データベース（Alphabetical list of translations of classical Japanese works up to 1600）｜マイケル・ワトソン／緑川真知子

2003-2004年度報告書「イメージとしての〈日本〉」
海外における日本のポピュラーカルチャー受容をめぐる研究

目次

005 はじめに ｜伊藤公雄

007 越境するポップカルチャー ｜表智之

015 第一部共同研究報告「海外における日本研究と日本文化受容」

017 韓国で研究されている「日本」 ｜山中千恵／李康熙／チョン・ヨンア／アン・ジヒョン／朴ヤンスン／堀江有里

029 台湾におけるジャパナイゼーション ｜屋葺素子／江佩蓉／洪国財／米田幸弘

041 中国における日本研究と日本文化受容状況 ｜佐倉智美／藤田嘉代子／李婉寧 屋葺素子／井手口彰典／岡本和恵／国枝有実子／柳沼典子

061 アメリカにおける日本のサブ・カルチャー受容について ｜前田雅司／岡田正 松本竜馬

075 ヨーロッパにおける日本研究とアニメ・マンガ受容状況 ｜Jessica Bauwens 太田健二／西村久美子／北野樹／高橋のり子

087 Images of Japan in Thailand ｜Rungthip Chotnapalai

093 第二部研究論文「イメージとしての〈日本〉」

095 テクノ（ロジー）ミュージックから見る「日本」イメージ ｜太田健二

101 欧米のヤオイ人気 ｜Jessica Bauwens

113 日本のポピュラー音楽の外国における受容——中国・北京での状況報告—— 屋葺素子

123 第三部「イメージとしての〈日本〉」（ポピュラーカルチャー分野）研究プロジェクトのあゆみ

125 ポップカルチャーの輸出をめぐって ｜伊藤遊

133 2003年度活動彙報

※2004-2005年度は報告書を作成せず

2005-2006年度報告書「イメージとしての〈日本〉」05
海外における日本のポピュラーカルチャー受容と日本研究の現在

目次

i　はじめに ——海外における日本のポピュラーカルチャー受容研究のために
伊藤公雄

001　第1部　海外における日本のポピュラーカルチャー受容と日本研究の現在

003　I　グローバリゼーションの中の日本のポピュラーカルチャー

005　クラブミュージックから見たグローバリゼーション〜アシッド・ジャズを事例に
太田健二

013　Japanese Comics and Globalization　｜ジェシカ・バウエンス

023　バックパッカーのカルチュラル・スタディーズへ向けて ——バックパッカー研究の現状と課題　｜藤田智博

033　日本マンガ的要素の現地化〜香港のマンガとポピュラーカルチャー
呉偉明（屋葺素子訳）

043　II　海外における日本文化研究の現在—調査報告

045　調査概要

053　アジアにおける日本研究の現在　｜屋葺素子／藤田嘉代子／山中千恵／朴ヤンスン／岡田トリシヤ・サラザル

091　ヨーロッパにおける日本研究の現在　｜東園子／唐澤佑子／杉本悦子／ジェシカ・バウエンス／レナト・リヴェラ

105　北米における日本研究の現在　｜前田雅司／稲見直子／スミス・ジョシュ

119　中南米における日本研究の現在　｜太田健二

127　オセアニアにおける日本研究の現在　｜藤田智博／伊藤遊／山中千恵

137　第2部　「イメージとしての〈日本〉若手研究者交流ワークショップ2005」より

139　I　論文編

141　バイナリズムの狭間で：消化されゆく「日本同性愛文化」表象への一考察
菅沼勝彦

151　Japanese anime becoming mainstream in the West...or is it ?　｜レナト・リヴェラ

157 「反戦」に写る自己像——「きけわだつみのこえ」の読みの変容と戦後のナショナリティー ｜福間良明
213 「他者」表象の可能性と限界——『日本人的一少女』を読む ｜梁仁實
231 津田左右吉が想像した共同体——邪馬台国・ヤマト・日本 ｜一瀬陽子
245 Ⅱ 座談会ポピュラーカルチャー研究とこれからの大学 ｜伊藤公雄／吉村和真 金水敏／川村邦光（司会 表智之）
267 海外日本研究機関一覧
323 イメ日活動彙報
335 執筆者・調査協力者一覧

※2006-2007年度報告書は、当報告書「イメージとしての〈日本〉」が該当するため省略する。

（以上作成：真鍋昌賢／伊藤遊／藤田智博）

執筆者・研究協力者一覧（五十音順）

執筆者

東　園子｜あずまそのこ

大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程。専門は社会学（ジェンダー論）、ポピュラーカルチャー研究。主要論文に、「女同士の意味――「宝塚」から読み取られる女性のホモソーシャリティ」（『ソシオロジ』(157)、2006）がある。

池田淑子｜いけだよしこ

大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程単位取得退学。文化記号学・映像研究。主な論文は、「他者の表象と自己の再構築 —『ラストサムライ』(2003) における「日本人」の映像と「アメリカ人」の再構築」新記号論叢書〈セミオトポス2〉『ケータイ研究の最前線』日本記号学会（慶応大学出版会2005年pp.210 – 230）、「他者の表象のアンビヴァレンス：映画『ガン・ホー』と『ブラック・レイン』の日本人のステレオタイプに見られるアメリカ個人主義の不安と両義性」『大阪大学　言語文化学』12巻（2003年pp.95 – 110）。

伊藤　遊｜いとうゆう

京都国際マンガミュージアム・国際マンガ研究センター研究員

伊藤公雄｜いとうきみお

大阪大学大学院人間科学研究科教授などを経て、現在京都大学大学院文学研究科・文学部教授。専攻は、文化社会学、ジェンダー論。主な著書に、『光の帝国／迷宮の革命』（青弓社、1993）、『〈男らしさ〉のゆくえ』（新曜社、1993）、共著書に、*Mirror of Modernity*（California UP、1998）。

太田健二｜おおたけんじ

大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程単位取得退学。専門は、社会学（コミュニケーション論）、ポピュラー音楽研究。クラブ・カルチャーをめぐる文化社会学というテーマで博士論文を執筆中。

染川清美｜そめかわきよみ

大阪大学大学院文学研究科博士後期課程。日本台湾学会員、天理台湾学会員、日本学校保健学会員、国際俳句交流協会員。専門は、文化社会学、日本文学、教育相談。主要論文は、"The Influence of Haiku on Countries Foreign to Japan" (World Haiku Review, 2003.12)、「アメリカ合衆国内俳句協会会員と留学生の俳句に対する現在の意識を探る」（俳句誌『なると』2005.1）、「不登校生徒対応のための学校内教育相談のあり方（その1～その4）」（『日本学校保健学会講演集（第41～4）』1994.11～1997.10.）。

古川岳志｜ふるかわたけし

大阪大学・関西大学他非常勤講師

前田雅司｜まえだまさじ　大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程。メディア論、ポスト構造主義／ポスト・モダニズム思想。主な論文は、「近代（モダン）の構造と身体性」『年報人間科学』（第25号、2004年）、「日本のサブ・カルチャーと物語性」『マンガ研究』vol.7（2005年、日本マンガ学会）。

真鍋昌賢｜まなべまさよし　大阪大学大学院文学研究科助手。専門は、民俗学、メディア文化論、芸能史。共著書として『新しい民俗学へ』（小松和彦他編、せりか書房）、『一九三〇年代のメディアと身体』（吉見俊哉編、青弓社）他。

水野　麗｜みずのれい　名古屋大学大学院人間情報学研究科満期退学。秋田工業高等専門学校講師。専門は日本近代文学、日本現代文化。主要論文に「「女の子らしさ」と「かわいい」の逸脱――「ゴシック・ロリィタ」におけるジェンダー」（『女性学年報』（25）、2004）がある。

山中千恵｜やまなかちえ　大阪大学大学院人間科学研究科社会環境学講座助手

吉澤弥生｜よしざわやよい　2003年3月、大阪大学大学院人間科学研究科修了。博士（人間科学）。専門は文化と芸術の社会学。主要論文に「レイモンド・ウィリアムズとメディア社会学――『テレビジョン』の視点と方法」（『社会学評論』51（1）、2001）、博士論文「レイモンド・ウィリアムズ研究」（2003）などがある。各校で非常勤講師を務めるかたわら、NPO法人[recip]地域文化に関する情報とプロジェクトでも活動。

研究協力者

表　智之｜おもてともゆき　京都国際マンガミュージアム・国際マンガ研究センター研究員

小林かおり｜こばやしかおり　大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程、NGO職員

白岩優姫｜しらいわゆき　大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程

杉本バウェンス・ジェシカ｜Sugimoto Bauwens, Jessica　京都精華大学マンガ学部マンガプロデュース学科助教授

朴ヤンスン｜Park Yang-Soon　大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程

堀　亜紀子｜ほりあきこ　大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程

三好一政｜みよしかずまさ　大阪大学大学院言語文化研究科博士前期課程

「イメージとしての〈日本〉」研究プロジェクトメンバー

金水　敏｜きんすいさとし	2005年度～研究プロジェクトリーダー 大阪大学大学院文学研究科教授
伊藤公雄｜いとうきみお	2002～4年度研究プロジェクトリーダー 京都大学大学院文学研究科教授 大阪大学大学院人間科学研究科招聘教授
冨山一郎｜とみやまいちろう	大阪大学大学院文学研究科助教授
川村邦光｜かわむらくにみつ	大阪大学大学院文学研究科教授
牟田和恵｜むたかずえ	大阪大学大学院人間科学研究科教授
山中浩司｜やまなかひろし	大阪大学大学院人間科学研究科助教授
杉原　達｜すぎはらとおる	大阪大学大学院文学研究科教授
荻野美穂｜おぎのみほ	大阪大学大学院文学研究科教授
真鍋昌賢｜まなべまさよし	大阪大学大学院文学研究科助手
ジェシカ・バウエンス ｜Jessica Bauwens	2002～5年度当COE研究員
伊藤　遊｜いとうゆう	2002～5年度当COE・RA 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程
表　智之｜おもてともゆき	2002～4年度当COE研究員 京都精華大学表現機構マンガ文化研究所研究員
山中千恵｜やまなかちえ	2002～3年度当COE・RA、2004年度当COE・RA研究員 大阪大学大学院人間科学研究科助手
古川岳志｜ふるかわたけし	2006年度当COEリサーチ・コーディネーター 大阪大学・関西大学他非常勤講師

大阪大学21世紀COEプログラム
「インターフェイスの人文学」研究報告書2004-2006〈全8巻〉
文学研究科　人間科学研究科　言語文化研究科　コミュニケーションデザイン・センター

第1巻　岐路に立つ人文学

第2巻　人文学討議空間のデザインと創出 ── 若手研究集合 ──

第3巻　トランスナショナリティ研究

第4巻　世界システムと海域アジア交通

第5巻　イメージとしての〈日本〉

第6巻　言語の接触と混交

第7巻　モダニズムと中東欧の藝術・文化

第8巻　臨床と対話

代表者　鷲田清一（拠点リーダー）

通巻編集　三谷研爾・藤本武司

第5巻　イメージとしての〈日本〉
#Volume 5 Imagined Japan

発行日　2007年1月31日

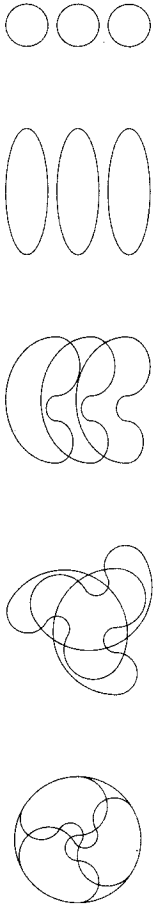
責任編集　伊藤公雄・金水 敏

編集　藤田智博

発行　大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」

〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5

大阪大学大学院文学研究科内COE事務局

組版・印刷　有限会社松本工房

表紙デザイン　西田優子